求道

第七卷
第貳號

求道第七卷第二號目次

◎信ずるほかに別の仔細なき也　求道　自督

◎慈父悲母　講話　近角常觀

◎本誓重願虛しからず　讃仰　和田龍造

◎蓮如上人の御文　告白　了信

◎聞書

◎慈光の照護　尾野敏雄

◎重々の御導き　宇野みね子

時報

◎仰恩紀行

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午后二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午后七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町説教所》

求道　第七卷第二號

信ずるほかに別の仔細なき也

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなりと。苟も歎異鈔を繙く人は必ず深く頭腦に刻みて忘るべからざる言である。現代の人にして親鸞聖人を渇仰し、眞宗を味ふの人にとりては熟讀反覆とても〳〵汲み盡くせぬ信仰の泉の源である。而して老翁老媼も、田夫野叟も、皆共に其味を同ふし其喜を共にする點である。大小の聖人、重輕の惡人皆同じく齊しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべしとあるが是である。

歎異鈔を讀めば何人も了解し安いが、歎異鈔と全く同樣の意味が明かに教行信證に於て告白なされてある。抑〻行卷に選擇本願念佛集（源空集）云南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と及び三選の文だけを擧げられたるのみにして、其他の一文一句をも擧げてないのが、即ちたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとの法然聖人の仰せである。たゞといふは選擇である。彌陀にたすけられまゐらすべしとは本願である。其選擇本願即南無阿彌陀佛である。歎異鈔の前の文に念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法門等をもしりたるらんとこゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんはおほきなるあやまりなりとあるが即ち往生之業念佛爲本である。よきひとは眞の善知識法然房源空聖人である。かくの如く頂いて見れば歎異鈔は實に教行信證にあらはれたる親鸞聖人の御自督を聖人の御口より直々告白して我等に知らして下された御教化である。教行信證は固形體であるゆへに之を溶解して液體となし我等に飲み安く、味ひ安くして下さつたのが歎異鈔である。否教行信證が漢文であるために我等は固形體の樣に考へるが抑々の誤である。教行信證も歎異鈔も畢竟筆に口にあらはれたる聖人御自督の告白夫自身である。

選擇本願念佛、即ちたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとの眞の知識の仰を信ずるほかに別の仔細なき也。和讃に曰く、諸佛方便ときいたり、源空ひじりとしめしつゝ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをばひらきける。眞の知識

におふことは、かたきがなかになほかたし、流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき。實に源空聖人は如來の選擇本願を日本一州に開闡すべく出現したまひし善知識である。源空聖人夫自身が選擇本願の體現である。專修念佛の實現である。抑信ずるほかに別の仔細なき也との絶對の信仰の起るは決してつとめて起るのではない、起らねばならぬ或者があるからである。信ぜねばならぬ本願力を敎へたまひたからである。信ぜざるを得ぬ本願力を體現したまひたからである。

執持鈔に曰く、故聖人のおほせには源空があらんところへゆかんとおもはるべしとたしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなりと。抑々法然聖人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候といふ確信は如何にも絶對の信仰にして一點の疑の存せざる態度は渴仰すべきの至なれど、單に師匠を信ずる道德的服從として感ずべきではない、畢竟如來の本願を信ずる信仰的態度の實現である。若し法然聖人にすかされまゐらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候といふを道德的服從として感ずる者は、源空があらんところへゆかんとおもはるべしといふ敎訓は無遠慮な命令と言はねばならぬ。然るに信仰的としては此無遠慮なる敎化自身が即絶對の信仰を起し來る所以である是即本願力の其儘を實現されたる絶對の力ある敎化である。

源空があらんところへゆかんとおもはるべしとは、何はともあれ、道理理窟を考ふるなかれ、結果の如何を慮る勿れ、此源空四十三の年に至るまであらゆる行を修し、あらゆる戒を持し、あらゆる實驗、あらゆる研究を經來りて、何等の効なかりしを自覺し遂に一心專念彌陀名號の文を見るに及び、初めて順彼佛願故の文字によりて如來の本願を見出し、選擇攝取の本意に順じてたゞ念佛するの他なし。是れ源空の信受奉行する所也。我と同一念佛の人々は我まゐらん所へまゐるべしと思ふべし。藥なるか、毒なるか、我がかくの如く自用するにて明らかなり。汝等決して危ぶむなかれ、我此の如く嚮導をなすべき也。汝等決して恐るゝなかれ、我此の如く運命を同ふすべしと。是法然聖人の自ら信じ自ら行ひ、自ら敎へたまひし所此の如き御敎化をきかば、念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん總してもて存知せざるなり、たとひ法然聖人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔

すべからず候の信仰が起らねばならぬことになる。

しからば法然聖人の此の如き手強き御敎化の起り來りたるは即本願力其儘の實現である。汝一心正念にして直に來れ我能く汝を護らん、すべて水火の二河に墮せんことを恐れざれ、其儘の實現である。詳言せば、地獄必定の我等に對して汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らんとの本願召喚の勅命である。其勅命の儘を信じ且つ敎へたまひし御敎化が即ちたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとの御敎化である。源空があらんところへゆかんとおもはるべしとの仰である。本願夫自身が、普通尋常の事でない、地獄必定のものを救はんが爲である。若し我が淨土に生ずれば正覺をとらじとの誓である。此本願力に遇ふときは空しく過ぐるとは出來ぬのである。地獄におちたりともさらに後悔すべからず候といふ、能令速滿足の聲が出て來るのである。此言は覺悟をきめて力んでいふた言ではない、御慈悲に滿足して我身の罪惡の深きことが氣に掛らぬ樣になつた所である。大滿足の告白である。

そのゆへは自餘の行をはげみて佛になりべかりける身が念佛をまふして地獄にもおちて候はゞこそすかされたてまつりてといふ後悔も候はめ、いづれの行もおよびがたき身なれば

とても地獄は一定すみかぞかし。是實に選擇本願が眞に聞き開かれた信心である我身の價値なきことを自覺した信相である。抑々選擇本願の本意は何れの行もつとまらぬものをたすけんとの大慈大悲である。自餘の行のはげみ得ざるものに與へんとの念佛である。即ち地獄一定のものを救はん爲の本願が、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしの勅命である。故に其本願に遇ひたてまつりて見れば我こそは自餘の行の及ばぬものである、地獄必定のものであるとの自覺を生ずるのである。否地獄必定も氣にかゝらず、地獄におちて後悔をもせぬのである。執持鈔に曰く、このたびもし善知識にあひたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし、しかるにいま聖人の御化導にあづかりて彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ淨土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるをいつはりて往生淨土の業因ぞと聖人さづけたまふにすかされまゐらせて、われ地獄におつといふともさらにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは明師にあひたてまつらてやみなましかば決定惡道にゆくべかりつる身なるがゆへ

にとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかば、ひとりゆくべからず、師とともにおつべし、されば たゞ地獄なりとゆふとも故聖人のわたらせたまふところへまゐらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらず、といふなり。これ自力をすてゝ他力に歸するすがたなりと。

嗚呼地獄必定の我等を救はんとの本願力である。法然聖人が此本願の儘を信じたまひし有樣が、御身にあらはれて、源空があらんところへゆかんとおもはるべしとの敎化となつたのである。此御敎化に遇ふてみれば信ずるほかに別の仔細なき也である。信じて滿足した有樣が法然聖人にすかされまゐらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候である。何んとなれば固より必定地獄におつべかりつる身にして、行く先きは聖人のわたらせたまふ所へまゐるのである。地獄であらうとも淨土であらうとも、總じてもて存知せぬのである。唯本願力を信ずるばかりである。地獄必定の我等を救はんとの本願力を信ずるばかりである。若し地獄必定の我等往生を遂げがたかるべくは、願徒然である、力虛設である。しかるに願力成就して、正覺を唱へたまひしより既に十劫の間我等を待ちたまふ、法然聖人經をよみて凡歷十劫に至りて感泣したまひしといふ、即此本願を示したまふが法然聖人の御敎化である。親鸞聖人が眞影附屬の御文にも當知、本誓重願不虛、衆生彌念、必得往生、とのたまふ。してみれば選擇本願念佛集附屬の御文の如く、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本即たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なき也である。是即聖人御自督の告白にして、我等が亦同一念佛無別道故の大信海である。聖人は此御自督を以て大經流通の文を御讀みなされて之を和讃に告白されてある。曰く、善知識にあふことも、おしふることもまたかたし、よくきくこともかたければ、信ずることもなほかたし。一代諸敎の信よりも、弘願の信樂なほかたし、難中之難ときたまひ、無過此難とのべたまふ。念佛成佛是眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ。聖道權假の方便に、衆生ひさしくとゞまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ。念佛成佛是眞宗とは、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしである。悲願の一乘とは選擇本願念佛である。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

自督

慈父悲母

○如來爲一切常作慈父母當知諸衆生皆是如來子世尊大慈悲爲衆修苦行如人著鬼魅狂亂多所爲是は涅槃經阿闍世王入信の時、佛弟子讃嘆の偈頌である、如來將に涅槃に入りたまはんとする時阿難を初め多くの佛弟子乃至一切の冥衆佛の止りたまはんことを請ひたてまつれども聽したまはなんだが、最後に爲阿闍世王不入涅槃と仰せられた、阿闍世とは普く及び一切の五逆を造る者のことである、如來は最後に至りて最も憂ひたまひたは父を害し、母を惱まし、佛に怨をなしたる阿闍世の身の上である、この阿闍世王とは我等五逆十惡の輩のことである、如來常住無有變易のやるせなき御思召は偏に我等がためであつた。

○娑婆往來八千度といふ釋尊の御苦勞も彌陀の五劫思惟永劫修行といふも偏に我等罪深きものゝためであつた、かくも我等がために御辛勞を下されたも唯このやるせなき親心を知らせんがためであつた、實に親心は狂亂せんばかりである、輕く親心を見てはならぬ、十劫已來胸も裂けんばかりであつた、私一人のために永々御苦勞をかけました、南無阿彌陀佛、々々々。

○回願するに此涅槃經の文は今より七年前私の父が亡くなりし時其遺愛の御假名聖敎の帙の裏に聖德太子磯長廟崛二十句の偈文と共に書きてありしを發見した時より氣附かせて頂いたのである、此文句は親鸞聖人聖德太子奉讃の奧書であつたのである、故に南無救世觀世音大菩薩哀愍覆護我、南無皇太子佛子勝鬘願佛常攝受と冠らせてある、聖人が大慈救世聖德皇、父のごとくにおはします、大悲救世觀世音。母のごとくにおはしますと仰せられし思召であろう。

○聖人十九歲磯長の參籠より晚年八十三歲奉讃御製作の時にいたるまで前後を回想したまひたならば如何にも護持養育の恩を感じたまひたことであろう、私は僅かに七年の間なれど事實に於て此御文の思召を深く〳〵頂かして貰ふた、況んや聖人九十年の御生涯に於ておや、其萬分の一を味はして頂くことが出來るも畢竟聖人の御蔭である、聖德皇のおあはれみに、護持養育たえずして、如來二種の廻向に、すゝめいれぬお

はします、中々一往二往のことではない、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり、前に擧げた涅槃經の阿闍世王入信の文を信卷に引き、また聖德太子奉讃に引きたまひしは、よく〳〵聖人御身の上に引受けたまひしことゝ仰ぎ奉ることである。

○聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、御述懷さふらひしことを、いたゞくところは此處である、是一つを知らしたいばかりである、聖人の九十年の御苦勞も之を我等に屆けたいばかりである、されば、かたじけなくも、我御身にひきかけて、われらが、身の罪惡のふかきをもしらず、如來の御恩のかたきことをも知らずしてまよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。

○かくの如く釋尊を慈父、彌陀如來を悲母と仰ぎたまひ、聖德太子を慈父とし、觀世音を悲母とし、又德號を慈父とし、光明を悲母と示したまふ、いづれをいたゞきても私がためにやるせなき慈悲の父母の親心を示して下さられた、ア、我等はかくの如き慈父悲母の恩德を蒙るといふは如何なる仕合ぞや。

○釋尊の發遣は偏に如來の願心を知らせんとの慈父矜哀の善巧である、彌陀の本願は即ち罪惡生死の我等をひたすらに助けんとの召喚の勅命即ち如來悲母の親心である、此二尊の敎に信順する一念が歸命である、銘文に、歸命はすなはち釋迦彌陀の二尊の勅命にしたがひ、めしにかなふとまうすことばなり、ア、釋尊一代の敎もこのやるせなき親心を知らせんがためにして、十劫已來待ちかねたまふもこの信樂の一念を起さしめんとの思召にまします、此親心をいたゞいた一念大慈釋尊大悲彌陀如來御滿足を以て我等をほめたまふ、釋尊は則我善親友と宣ひ、彌陀は攝取不捨の懷におさめとりてすてたまはぬのである、極惡深重の衆生大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲るなりと仰せられたが此處である、天親菩薩が世尊我一心、歸命盡十方無碍光如來とは此歸命の一念自督したまひし告白である、世尊は慈父に啓白せられし言である、歸命盡十方無碍光如來は悲母の勅命に信順せられしありさまである、曇鸞大師が夫れ菩薩の佛に歸することは孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して不動己に非す、出沒必ず由あるが如

し恩を知りて德を報ず、理宜しく先づ啓すべしと仰せられたが是である。

○偖此親心を親鸞聖人のいたゞきたまひしは十九歲磯長參籠がもとゝなりて二十九歲遂に六角堂觀世音の導により、遂に法然聖人に遇ひたまひて選擇本願を信受したまひたのである、此に於て汝命根應十餘歲、命終速入淸淨土の豫想が實現したのである、常にいふことであるが愚禿鈔に本願を信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なりとあるが即是である、其一念正定聚に入りて善信々々眞菩薩の境に入りたまひたのである、愚禿鈔に便ち彌勒菩薩に同じと仰せられたが是である、和讃に佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなりと仰せられたは決して偶然でない。

○親鸞聖人と聖德太子との關係は不可思議といふより外はない、事實としてはたしかに神秘的なる靈告によりて直接なる敎勅を受けられてある、而して之が實行上の問題としてあらはるゝときは歷々として歷史上其揆を一にするに至るは洵に不可思議と云はねばならぬ、親鸞聖人の家庭の問題の如き其源淵は疑もなく六角堂の靈告に基くなれど其結果は全く聖德太子の化儀を再演せらるゝことゝなつた、其前聖後聖其揆を一にして內鑒映徹さるゝことは唯佛智不思議と仰くより外はない。

○二十句の偈の如きは聖德太子奉讃の奧書にあることはかねて承知をして居たれども未だ其眞蹟を拜せなんだ、しかるに今年二月二十一日聖德太子の御祥月に加賀の專光寺に於て宗祖關東御化導の時御携帶したまひし長圓法眼の筆になる太子御像の添書として二十句偈の八句を書きたまひし御眞蹟を拜するを得て、ます〳〵聖人が皇太子に法りたまひし事實をます〳〵明らかにいたゞくことが出來た。

○其翌二十二日御命日に越前金津永宮寺に於て法隆寺より出て蓮加上人吉崎御滯在の時御崇敬なされ太子堂といふ御裏を賜はりた御姿を拜するを得た、是て此太子に詣すること十年來前後四回である、今年の御祥月には此の如く親鸞聖人蓮如上人御因緣深き太子樣を拜することを得たは實に難有い御緣を蒙りた。

○聖人が此如く聖德太子の御導きを蒙られしも畢竟大慈大悲のやるせなき願心よりあらはれ下されし思召である、釋尊が敎主世尊であるが如く、聖德太子は和國の敎主である、其敎

主が聖人に靈告して佛智不思議の誓願を知らして下されたのじや、聖人が聖德太子及び其本地なる觀世音を以て慈父悲母と仰せらるゝは尤である。

○釋尊にせよ、聖德太子にせよ、畢竟如來大悲の親心を知らせんためである、そこで頂くのは偏に彌陀悲母のやるせなき親心ばかりである、其親心をいたゞくにつきて亦名號を以て慈父とし、光明を以て悲母と喩へて下さつた、これはいよ〳〵御慈悲をいたゞく一念の信の實驗の味である。

○六字の德號は親が名乘りを擧げて我等を喚びたまふ慈父である、偏照の光明は徐々に我等を照らして我等の宿善を開發せしめたまふ悲母である、遂に此慈父悲母の思召が我等に屆いた一念が光明名號の因緣合して信心の業識を生じたのじや、如何に名號を耳にし口にするも、いよ〳〵如來の光明に照されねば名號の味が分らぬ、たとひ光明に接しても、如來の御名を聞かなんだなら親樣に遇はれぬ、しかるに光明名號の因緣熟するや否や、嗚呼如來大慈の御佛は大悲矜哀の光明の智相にてましますと心に知れた一念が初めて親に名乘りを擧げて忽ち其懷に抱かれた心地じや、之が即ち信心の業識を生じたのじや、換言せば佛は慈悲の塊にて在すと頂いた時ははや攝取光明の中に護念さるゝ身となつたのじや。

○父と母が私を生みつけて下されたが、若し生み付けたばかりで養育して下さらなんだならば成長する筈がない、名號と光明とは因緣和合して信心を生みつけて下さつたが其信心は矢張光明名號の慈悲の父母によりて養育せらるゝのである、一たび御慈悲に氣附きたるときは自然に德號を唱へられ、亦大悲無倦の光明に照護せらるゝのじや、かく信心の內因が名號光明の慈父悲母の外緣に護持養育せられて報身の果を結ぶのである、何から何までも慈父悲母の御恩の極まりなき次第である。

○かく報土の眞身を得て大悲の親に遇ひ奉つれば亦我も普賢の德に歸して衆生濟度の大慈大悲心を生するやうになる、是も畢竟如來還相廻向の本願によりて我等に與へ給ふ如來の惠である、夫故和讃に往相廻向の大慈より、還相廻向の大悲をうと仰せられた、かくすべて如來大慈悲の廻向より他はない。

○かくすべて如來の大慈大悲ならぬはない、それゆへいづれの所にも常に慈父悲母の親心が溢れてまします、聖人の御筆には到る處にあらはれてある、此頃も慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、

大安慰を歸命せよの和讃を拜誦するに、慈光の左訓にシハチ、ノシヒニタトフルナリとあるに其御注意の深きに驚嘆したてまつたてある、母の慈悲を說かるゝは愚禿鈔上の終に曰く、勢至章云十方如來憐念衆生如母憶子大論曰譬如魚母若不念子即子壞爛等、いかにも適切なる悲母の親心てある、勢勢至讃に子の母をおもふがごとくにて、衆生佛を憶すれば、現前當來とをからず、如來を拜見うたがはず、これ眞にやるせなき悲母の親心を盡くされてある。

○かくもやるせなき親心をいたゞきて見れば如何にも我不孝忘恩の罪深きことを慚愧懺悔するの外はない、抑々此慚愧の心の起るまてがかく罪深き私を哀愍したまふ大慈大悲に滿足するより起るのてある、大慈大悲の光明に照さるればこそ煩惱の氷解けて功德の水となるのてある、何れの行も及びがたき身なれば地獄は必定すみかぞかしと知れたのはもと何れの行も及びがたき我等の心を知ろしめす大慈大悲が觀そなはすからてある、如意の釋に仰せらるゝ如く一は衆生の意の如く彼心念に隨て度したまふ、二には彌陀の意の如く自在に機の度すべきものを觀そなはして三輪開悟して各益したまふことさま〳〵てある、かくやるせなき親心を承りて見れば我等は慚愧するの外はない、夫故に曰く一切往生の知識等に敬白したてまつる、大に須らく慚愧すべし、釋迦如來は實に是慈悲の父母なり、種種の方便を以て我等が無上の信心を發起せしめたまへりと、三月十二日先考慈光院七周忌祥月命日、つゝしみて慈恩を追懷しつゝ啓白し奉る。

一、蓮如上人、法敬に對せられ候。今此彌陀をたのめといふことを御敎へ候人をしりたるかと仰せられ候。順誓存せずと申され候。今御をしへ候ひとを云べし。鍛冶番匠などに物ををしふるに、物を出すものなり。一大事のことなり。何ぞものをまいらせよ、いふべきと仰せられ候時、順誓なか〳〵何たるもの成りとも進上いたすべきと申され候。蓮如上人仰せられ候。此事ををしふる人は、阿彌陀如來にて候。阿彌陀如來の我をたのめとの御をしへにて候由仰られ候。

一、凡夫の身にて後生たすかるこはとたゞ易きとばかり思へり。雖中之雖とあれば軟くおこしかたき信なれども、佛智より易得成就したまふ事なり。往生ほどの一大事。凡夫のはからふべきにあらずといへり。前住上人仰に、後生一大事と存ずる人には御同心あるべきよし、仰られ候と云云。

（蓮如上人御一代聞書）

講話

本誓重願虚しからず

《求道學會日曜講話》

近角常觀

一

今日の題は『本誓重願虚しからず』といふのであります。之は御存知の如く御開山聖人へ法然聖人より御附屬なされた御文に、

南無阿彌陀佛若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虚、衆生稱念必得往生。

と本願の儘をお授けなされた御文がある。其の一句を取りて題にしたのであります。此のお言葉は常に申す親鸞聖人の御影の上にある

彼の佛の本願力を觀そなはすに、遇うて空しく過る者なし、能く速に功德の大寶海を滿足せしむ。

といふ御文と同意味の御文である。此の味ひは既に度び〳〵話したのでありますが、如何にも玆を頂くと尊き事極まりが無い。色々の御文を讀ませて貰ふに、何を讀みてもつゞまる所皆な此の一點に落ち來るのである。其の極まりの無い味ひを諸方面より色々と深く喜ばせて頂き度いと思ふのであります。

初めに今申した御文をは自分の心に喜ばせて貰うて居る所から並べ立てゝ申しますと、第一今申す如く御開山聖人が法然聖人より御付屬せられた御文が、今の善導大師の「若し我成佛せんに……衆生稱念すれば必ず往生を得」の文である。先づ第一に此の御文が開山聖人が法然聖人よりお頂きなされた御文であるから何より難有いのであります。其の御文は先づ初めに佛の本願をお示し下されて、「若し我成佛せんに十方の衆生我が名號を稱へて下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らず」と、如來の本願に玆に明かに誓はせられてある。其の本願をお建て下された佛が既に成佛せられてある上は、「本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」である。衆生此の本願を頂いて、南無阿彌陀佛々々々と稱へれば、往生を得る事疑ひ無いと言はれたのである。此の御文が今言ふ御開山聖人が一代お喜びなされ、殊に「行卷」にお引きなされた天親菩薩の「莊嚴不虚作住持功德成就」――不虚作住持といふは虚しく作らぬといふ事である。其の虚しく作らぬといふは、佛の本願力を觀そなはすに、遇て空しく過る者無し、能く速に功德の大寶海を滿足せしむ」の文であると言はれたと同意味である。之をば『論註』の文には叮嚀に書いてあつて、

淨土論に曰く。何者か莊嚴不虚作住持功德成就。偈に觀佛本願力、偶無空過者、能令速滿足功德大寶海故と言へり。不虚作住持功德成就とは、蓋し大阿彌陀如來の本願力なり。今當に略して虚空の相にして住持に能はざるを示して、用て彼の不虚作住持の義を顯す。(乃至)言ふ所の不虚作住持

とは、本藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力とに依る。願以て力を成す。力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力願相府ふて畢竟して差はず。故に成就と曰ふ。云云。

「願徒然ならず、力虚設ならず」で、阿彌陀如來の本願は徒らに設うけ給ふのては無い。此の佛の願力がある上は決して之が虚しく過る事は無いのてあるとお示し下されたのてある。此の文と今の善導大師の「彼佛今現在成佛」の文とは全く意味が同じなのてあります。此等の文から頂とく、既にお互が頂いて居る『歎異鈔』の第二章にしても又『執持鈔』の第二章、若くば『口傳鈔』の御教化にしても、皆同じ所の佛の廣大本願力によりて我々がお助けに預る佛願の力強い處をお示し下された文である。之等を皆一緒に寄せ集めて今日は御開山のお喜びなされた如來本願の廣大なるお力を頂かせて貰ほうと思ふのであります。

大分話が筋道の方が主になつて來ましたが、つまり如來の廣大なる本願のお力に遇へば、我々は空しく過ぎる事は無い。此の廣大の本願の居て下さる以上、我々は助からずには居らぬといふ事をお示し下された文である。先づ第一に今の『淨土論』の御教化より頂くと、先づ最初に「佛の本願力を觀そなはすに」とある。本願が第一番に出て來るのである。之は今の御開山聖人へ法然聖人御付屬の善導大師の文にしても「南無阿彌陀佛、若我成佛十方衆生……不取正覺」と、先づ初めに如來の本願を擧げ、次に「彼佛今現在成佛當知本誓重願不虚云云」と示されてあるのである。此の本願といふ事があるから、此の廣大の御示が出て來るのてある。本願が一番の大もとに成つて來るのてある。故に『淨土論』にも「佛の本願力を觀そなはすに」といふ文が一番初めに措いてある。若し本願が無ければ我々の目當てとすべき所も、力とすべき所も無い。我々は本願と言へばもう耳慣れ、言葉慣れが仕て仕舞つて、つい其事と思ひ過すのてあるが若し此の如來の本願力無りせば、天地の間恢廓窈窕浩々茫々として、何れにも手懸りの無い人生てある。過去は生の從來する處を知らず、未來は死の趣向する處を知らず、手懸りといふものは人生に一つも無い。我々の頂かして貰ふごく肝心の處は、此の曠劫過古の古より盡未來際の末に至る迄、生死の苦を初めとして仕て見やう無き我々に、不可思議なる哉、佛の廣大の思召が顯はれて下されて、此の私を空しく捨てず、此の私を飽迄救はんとて、南無阿彌陀佛と姿を顯はし、南無阿彌陀佛と誓ひを立てゝ、此の罪深き我々を救はんとて姿を現はし下された。之が佛の本願てある。開山聖人も

聞くといふは衆生佛願の生起本末を聞きて疑心有ること無し。之を聞くといふ。

と仰せられた。本願をあだおろそかに聞いて居ると、信仰の源は無くなつて仕舞ふのてある。信仰の起る源は此の如來の本願、之あればこそ信仰が來るのてある。

其處て話が段々廣くなりますが、御開山聖人は『眞佛土卷』に於て、――眞佛とは眞實の佛の事を眞佛とお示し下されたのてある。其の眞實の佛の姿をお示し下された『眞佛土卷』に於て、如何なるが眞の佛てあるかといふ事に就いて、眞佛と

は光明無量壽命無量のお姿で、十方衆生を救うて下さる阿彌陀佛であるとお示し下されてある。其光明無量なるは無明の暗に迷へるを照らさんが爲てある。其の壽命無量なるは生死の海に惱めるを救はんが爲てある。其の光明無量壽命無量の佛のお姿の根本は何んであるか。つまり光明も壽命も共に我々を救はんが爲に現はれて下された佛の姿に外ならぬのである。故に阿彌陀佛と言へば其の姿其の儘が我々を救ふとの廣大本願のお姿である。其處で聖人は『眞佛土卷』に於ても彌々眞佛の何であるかを示す時には矢張り同じく「觀佛本願力云云」の文を引いてお出になるのである。其の思召は何うかといふに、如來と言へばつまり我々を救ふとのお姿である。此の私を救ふために現はれ下されたが如來である。眞の佛とは此の我々を救はんとある廣大本願の御心である。他迄見捨てぬとの如來廣大本願の御現はれが佛である。との思召である。其處で『行卷』には又宣はく。

爾れば眞實の行信を獲る者は心に歡喜多きが故に是を歡喜地と名く。是を初果に喩ることは、初果の聖者尙ほ睡眠懶惰なれども二十九有に至らず、何に況や十方群生海、斯の行信に歸命すれば攝取して捨てたまはず。故に阿彌陀佛と名けたてまつる。是を他力と曰ふ。云云。

抑々龍樹菩薩は初歡喜地の菩薩である。其初地の龍樹菩薩でさへも佛の惠みによりて救はれ給ふたのである。如何に況んや十方群生海、此者を助け給はぬといふ事は無い。苟も念佛の衆生は皆悉く攝取して捨てゝ下さらぬのである。是の故に此佛を阿彌陀佛と言ふのであるとお示し下されたのである。

言ひ換へると阿彌陀佛とは、即ち廣大本願其儘の御現はれてある事をお示し下されたのである。

さて斯く頂く時は、抑〻如來のお姿と云ひ、如來のお慈悲と云ひ、つまり何かと言ふに、我々を助けん爲に現はれ下された本願であり、南無阿彌陀佛であり、光明である。して見れば他力の法門に於ては我々の頂き處は此の本願の外には無いのである。故に初めの善導大師の御文に於ても「彼の佛今現在に成佛したまへり」と御示し下されてある。抑〻既に此の佛のお姿まします事が何より本願の御成就せられてある確證である。故に「本誓重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」である。一念南無阿彌陀佛と頂く者は必ず往生疑ひ無いとお示し下されたのである。之を又後に戻りて頂く時は、即ち「佛の本願力を觀そなはすに云云」の文である。皆な悉く一つ所に來るのであります。

二

さて餘り何も彼も一緒に話すと却て譯が分らぬやうになる。御開山聖人の頂かれた上よりいふと、『淨土論』の文が一番親しいようであるから、之よりは『淨土論』の文を中心として遣る瀨なき本願の御力を段々喜ばせに貰ほふと思ひます。一寸飛び越えて話しますが、私共斯く本願力の廣大な事を頂くと、小供の時より常に聞いて居た本願力であるけれども、今こそは明かに其の本願の尊い事が頂かせて貰へたと實に不可思議に思ふ事である。兎角青年の人が信仰を求めるとなると、佛を信ずるといふが其の佛とは一體何であるか。南無阿

彌陀佛とは何であるか。五刼兆載永刼の修行などいふが、一體何處にそんな事實が有るのであらうか。などといふ事を能く考へるものである。私如き生れてより宗敎の中に生活して居る者でも、本を讀んで居る間はこんな事を考へた事、實に長い間であつたのである。肝心の本願を頂かぬと、如何に研究し、如何學問しても皆な水泡になつて仕舞ふのである。此の根本の問題が解らぬ間は、誰でも佛とは如何、本願とは何んであるか。光明とは一體何處から來るのであるか、などゝいふ事を考へるものである。去りながら夫がより以上に說明が出來、より已上に譯が分る位ならば如來の本願は現はれては下さらぬのである。夫れ以上に知れる位なら南無阿彌陀佛と簡單に御示し下さる事は無いのである。夫れ以上の事を知り度いと思ふのが間違ひで、其者を救はずには措かぬといふ遺る瀨なき御心を形に御示し下されたのが本願、其の親の御姿を我々に示して下されたのが名號である。此の外に物は無いのである。

此間も或人が來て話されるには、自分も前には隨分亂暴で、御慈悲の事を聞くに貴方は佛敎の言葉で說明するから分らぬ。世間の理屈から說明して呉れと或る御方に持ちかけた事がある。思へば如何にも勿體無い事を言つたものである。今朝も『御一代聞書』を拜讀して居ると、

彌陀を賴めば佛になる。其支證は南無阿彌陀佛よ。

と仰せ下されてある。彌陀を賴めば佛になる。其の何よりも確な證據が南無阿彌陀佛であると頂くと、もう何も言ふ事は無いのである。前には其の支證が南無阿彌陀佛と聞いたつて、唯夫丈けでは分らぬてないかと言つて居つたものが、今では段々頂かせて貰ふて此の言葉一つで充分腹ふくらせて貰へる事が出來る。斯く思ふと嘗て此の如來本願の事を世間の理屈で話して欲しいなどゝ言つたは、誠に以の外の事であつたと話された。如何にも此の方の言はるゝ通りである。今の善導大師の御文に「彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛云々」と言はれた處が茲である。今現に彼の佛の成佛下されてある御姿が何より本願の出來上つてある證據である。今茲に佛のお姿の居て下さる事が何よりも南無阿彌陀佛若不生者不取正覺とお誓ひ下された本願の空しからぬ證據である。茲になるとどつちがどつちの證據やら分らぬ。本願の證據には佛があり、佛の證據には本願がある。又本願の證據には名號があり、名號の證據には本願がある。之ばかりは證據も本意も一緒くちやである。故に唯お慈悲の一つにさへ氣づかせて貰へば、本願といふも名號といふも、一つである。つまり『執持鈔』に

本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願。

とお示し下されたは卽ち茲である。佛如何に思うて下されても本願が我々に屆いて下されぬ時には仕樣が無いが、今佛の本願は行者に屆かさずには措かぬといふ本願である。屆かぬ時には本願は空しくなつて仕舞ふのである。本願の尊い處は何處かといふに、いやでも應でも我々に屆けて救はにや措かぬといふ茲が有難いのである。故に此の私を離れて本願は成り立たぬ。子無しに親と言はれぬ如く、如來の本願は十方の衆生、生きとし生ける者は必ず救はにや措かぬといふあなたの遺る瀨無き御心故、行者を離れて本願は無い。茲が言ふに言は

れぬ有難い處である。何處から何う頂いても結局頂き處は此の本願の外には無いのである。此の本願があればこそ如來の遺る瀬なき御心が頂かれるといふものである。

さて話が前に戻りますが、今の『淨土論』の御文に頭から「佛の本願力を觀そなはすに云云。」――色々申しますが結局本願力が本である。『歎異鈔』の初めにも、

彌陀の誓願不思議に助けられて參らせて云云。

他力の敎えは本願から言ひ出すより外に言ひ出し樣は無いのである。其の本願が何うぢやと言ふたとて、其の已上の說明は仕て見やうが無い。本願とは廣大なる法身の佛境界より我々迷ひの衆生を御覽下されて、其の遺る瀬無き御意の中を言ひ表し、お傳へ下されたが本願である。斯くいふに以上、もう外に言ひて見ようは無いのである。法藏菩薩は此の願を言ひ表はす爲めに出現して即ち無上殊勝の願を御建立下されたのである。『正信偈』には宣はく、

法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在しまして、諸佛淨土の因、國土人天の善惡を觀見して、無上殊勝の願を建立す。

御開山聖人は此の建立の字に左訓を施して、「ハジメテタテル」と仰せられてある。「ハジメテ」とは我々が救はれる初めは此の本願が初めであると申すのである。又『自然法爾章』には宣はく。

……はじめて彌陀佛とはまふすぞときゝならひてさふらふ。云云。

抑、如來本願の初めは、此の罪惡の者を救はんといふ、此の大悲大願が始めてある。もう茲になれば廣大とも廣大とも此已上に何んとも言つて見樣が無い。此本願以上の事が知れる筈も無く、又知る必要もないのである。茲に於てか御開山聖人は直ぐ此の本願に海の字をくつけて本願海とお示し下された。本願を直ぐ海に喩へて、或は「大願海のうちには」とお示下され、或は弘願一乘海と御示し下されてあるのである。何故かと言ふに此の本願の廣大な事は迚も外には言ふて見樣が無いからである。

偖て此の不思議の本願海は何如にして信ずるのはあるか。此方から力みて信じようとして信じられるのではない。御開山聖人は本願力回向と御示し下されてあるのである。如來の遺る瀬無き廣大なる本願の慈悲海は、如來の方より我々一人々々の胸の中へ、如來の方より至り屆いて下さるのである。之が廻向である。此方が信ずるの修業するのと、此方の方て何う斯うするのて無い。如來廣大の本願力は其の此の上もなき大願業力を以て、如來の遺る瀬なき思ひをば此方の方へ廻らし到らせて下さる。之が本願力廻向である。其の本願力廻向を何ういふ具合に頂くのかといふに、御開山聖人は「觀佛本願力」の觀の字に特に力を入れて御示下されてある。『觀經』の韋提希夫人の處に、

爾の時世尊韋提希に告げたまはく、汝今知るやいなや、阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝當に繫念して諦に彼國の淨業成したまへるひとを觀ずべし。

といふ御文がある。此の觀の字を御開山聖人は『化身土卷』に御示し下されて

本願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべしとなり。

と仰せられてある。觀知するとは觀じ知るのである。觀し知るとは即ち信するのである。如來の惠みを信じて一點の疑ひも無くなつたのが觀知したのである。御開山聖人は此の觀の字を非常に重く御覽なされた故『愚禿鈔』の中には又善導の「願入彌陀界歸依合掌禮」の文をお引きなされて

觀入彌陀阿界　歸依合掌禮

とお記しなされてある。夫れ程迄に此の觀の字を重く御覽なされたのである。

さて夫れ程迄に如來の本願力を明かに信じ明かに信知して、一點の疑ひも無くなれるといふは何うかといふに、此方の力では更に無い、如來の方より此方へ向つて下さる本願力廻向の御力がある。此の御力がある故に信ぜざるを得ず、仰がざるを得ぬのである。て御開山聖人は「觀佛本願力」の觀の字に「みそなはす」と假名を附けられた。此の觀そなはすとお讀み下されたが實に難有い。如來の本願力を觀知する信知するといふのは、我々が觀知し信知するのではなく、如來の方より我々を知し召し、觀そなはし下さるのである。我々の方より如來を觀じ如來を知るのでは無くて、如來の方より我々を見そなはし知し召し下さるのである。我々の方は其の廣大の知し召し下さる御意を仰ぎ、其の見そなはし下さるお力を頂くばかりである。此の私が罪の深い事も迷ひの深い事も、苦惱も罪業も、皆ちやんと佛は見そなはし置いて下されてあるのである。もう此の本願力が觀そなはし下さる上は「遇うて空しく過る者なし、能く速に功德の大寶海を滿足せしむ」である。功德の大寶海が滿足する源は、此の如來の本願海があるからである。「遇うて空しく過る者無し」は、遇ふ者の方て空しく過ぎぬのては無い。本願力が強い故、空しく過ごさしめ給はぬのである。此の光に遇ふ者は空しくせぬとの本願の惠みである。何もかも皆な此の本願力より來るのである。一度此の如來の本願力の源が我々罪惡の者の胸中に聞えて下されば、空しく過る者は一人も無い。皆な悉く本願力の廻向て御悲慈の中に引き入れて下さるのである。

餘り話がくどくなりますが、我々が滿足させて貰ふ源は反すゝも「佛の本願力を觀そなはすに」の一句にある。如何なる境遇如何なる場合てあらうと、如來の本願力の觀そなはしましまさぬ處、如來御廻向のましまさぬ所はひと所も無い。茲を能く聞かねばならぬのである。先きに申した御開山聖人が「衆生佛願の生起本末を聞く」と御示し下されたは即ち茲を聞くのである。如何程申しても切りは無いのであります。

三

次に其の本願力の遺る瀬なき所を最も強く明かに御示し下された處は例の『歎異鈔』の

善人なをもて往生をとゞ、いはんや惡人をや。

の御文である。是れ實に本願の正意、大悲の胸を痛めさせられた本願の根底が此の一句である。夫故振り反へると、『行卷』一部に御示し下された所が皆な此の一句に外ならぬのである。『行卷』に法然聖人『選擇集』の

南無阿彌陀佛。往生之業念佛爲本。

の文を御引きなされたは何であるか。『歎異鈔』に

しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんはおほきなるあやまりなり。（中略）親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずる外に別の仔細なきなり。云云。

親鸞に於きてはよき人法然聖人より「往生之業念佛爲本」と聽く上は、此の念佛を頂いて喜ぶ外に別の仔細は無いのである。「彌陀の本願は南無阿彌陀佛の外には無いぞ、此の南無阿彌陀佛は如何なる惡人、如何なる罪人、如何なる破戒無戒の輩をも之を救はんとある廣大の念佛であるぞ」といふ法然聖人の念佛の仰せを頂くばかりであると御示し下されたのである。

此の文を引いて次に『行卷』には如何に御示し下されてあるかといふに、

明に知りぬ。是れ凡聖自力の行に非ず。故に不廻向の行と名るなり。大小の聖人、輕重の惡人皆な同じく齎しく選擇大寶海に歸して念佛成佛すべし。云云。

大小乘の聖人て有らうが、輕重の惡人て有らうが皆な同じく齎しく選擇大寶海に歸して念佛成佛する。大小乘の聖人ても猶ほ助けるのである、況んや輕重の惡人は勿論念佛成佛する。十方の衆生、生きとし生ける者は皆な悉く救はにやおかんとあるが本願念佛の御意であると御示し下されたのである。斯く頂くと、もう是れ程明かな尊い信心は外には無い。天地の間茫々として何處に一點として目當ての無い我々に向つて、大悲の遣る瀬無き御意から此者に一つの南無阿彌陀佛を與へ、有らゆる有象無象蠢々蠕動の輩に至る迄、如何なる惡人罪人ても皆な悉く救はにや措かぬとある親心を示された本願、其の本願の表はれが南無阿彌陀佛と氣が附けば、我々は此の本願の前に一言の言ふ事は無いのである。唯もう此の廣大のお惠みを頂く外は無いのである。

其の本願の思召は如何にと言ふと、大小の聖人とあるが、殊にみ心を惱ませられたは我々惡人の上である。初めにも申した御文であるが、『行卷』今の次ぎの御文には宣はく

爾れば眞實の行信を稽る者は心に歡喜多きが故に、是を歡喜地と名く。是を初果に喩る事は、初果の聖者尚ほ睡眠懶惰なれども二十九有に至らず、何に況んや十方群生海斯の行信に歸命すれば攝取して捨てたまはず。故に阿彌陀佛を名けたてまつる。是を他力と曰ふ。云云。

龍樹菩薩は大乘初歡喜地の菩薩である。其の龍樹菩薩でさへも自分の力で助かられたのでは無い。長々の自力の心を翻して此の彌陀の本願に歸して救ひに遇はれたのである。其の大乘の菩薩達でも惠みに救はれると、睡眠懶惰なれども二十九有に到らぬ。大乘の聖者達でも既に此の通りである。況んや我々睡眠懶惰、邪見放逸、不法懈怠の者は猶ほの事助からずに居られぬ。十方群生海斯の本願に歸すれば必ず攝取不捨の御利益に預るのであるとお知せ下されたのである。又此の度

びは小乘の聖者の事に就きて同じく『行卷』には、

願海は二乘雜善の中下の屍骸を宿さず、何に況んや人天虛假邪僞の善業雜毒雜心の屍骸を宿んや。

此の度びは小乘の聖人である。二乘といふ佛に從ひ法を聞かれた聲聞、緣覺の聖者達でも、此の如來の本願に遇へば今迄の善根は間に合はぬ。皆な悉く打ち捨てゝ偏に如來の大悲の中に救はれ給ふのである。如來の本願は二乘のような聖人達でも皆な救ひ給ふのである。況んや人天の虛假邪僞雜毒雜心の屍骸を大悲の本願が見捨てゝ置き給ふ事が有るものか。皆な悉く見捨てずに救ひ給はるのである。斯くの如く二乘のような善人すら捨てず、大乘の聖人さへ捨て給はぬ本願である。況んや我々如き仕て見やうなき罪深き者を何うして放つて置き給ふ事が有るものか。抑々佛が何の爲めに出現下されたかといふに、此の迷うて居るお互、罪深き我々をお救ひ下さらんが爲めである。其佛の本願が何うして此の罪人惡人を放つて置き給ふ事が有らうか、といふのが今の『歎異鈔』の「善人なほ以つて往生をとぐ、況んや惡人をや」の文であります。

以上は近頃喜ばせて貰うて居る處を思ひ出す儘にお話したのでありますが、要するに他力の頂き所は唯一つ、其の一つは如來の本願である。其の本願は大小の聖人をすら助け給ふのである、況んや我々惡人は猶ほの事救はずには置き給はぬといふ茲の本願の正意を能く〳〵頂かせて貰はねばならぬのである。『口傳鈔』には宣はく、

本願寺の聖人黑谷の先德より御相承とて、如信上人云云とあるは、能く〳〵茲の處が如來の本願力廻向について肝要なからである。

……世のひとつねにおもへらく、惡人なをもて往生す、いはんや善人をやと。このこととをくば彌陀の本願にそむき、ちかくば釋尊出世の金言に違せり。……

惡人猶ほ以て往生す、況んや善人をやなどゝ言つて居るのは全く彌陀の本願とはさかさまである。彌陀の本願は惡人すら助けて下さる、況んや善人をやと言ふ時は一應は最もらしく聞えるけれども、此事遠くば彌陀の本願に背き、近くば釋尊出世の本意にあべこべである。肝心の親の大悲の大もとを聞くと然うでは無い。

……そのゆへは五刼思惟の劬勞六度萬行の堪忍、しかしながら凡夫出要のためなり。またく聖人のためにあらず。

しかれば凡夫本願に乘じて報土に往生すべき正機なり。……

御開山聖人は茲に思ひ切りお示し下された。抑佛が本願を御建て下されて、其の本願の生起本末の大もとたる五刼思惟の御苦勞、六度萬行の堪忍は、此の凡夫をして出離を得せしめ度いが爲めばかりの御苦勞である。全く以て聖人や善人の爲めでは無い。聖人や善人は或は自分の力で助かる事が有るかも知れぬが、凡夫に至りては全く其の道が堪え果てゝある。其の凡夫を助け度いが爲めばかりの御苦勞であれば、彌陀の本願は全く以て凡夫の爲である。法然聖人の『選擇集』の上には宣はく、

淨土宗の意本凡夫の爲めにして、兼て聖人の爲めなり。云云

態々本願寺の聖人黑谷の先德（法然聖人）より御相承とて、如信上人云云とあるは、能く〳〵茲の處が如來の本願力廻向について肝要なからである。

……世のひとつねにおもへらく、惡人なをもて往生す、いはんや善人をやと。このこととをくば彌陀の本願にそむき、ちかくば釋尊出世の金言に違せり。……

惡人猶ほ以て往生す、況んや善人をやなどゝ言つて居るのは全く彌陀の本願とはさかさまである。彌陀の本願は惡人すら助けて下さる、況んや善人をやと言ふ時は一應は最もらしく聞えるけれども、此事遠くば彌陀の本願に背き、近くば釋尊出世の本意にあべこべである。肝心の親の大悲の大もとを聞くと然うでは無い。

……そのゆへは五刼思惟の劬勞六度萬行の堪忍、しかしながら凡夫出要のためなり。またく聖人のためにあらず。

しかれば凡夫本願に乘じて報土に往生すべき正機なり。……

御開山聖人は茲に思ひ切りお示し下された。抑佛が本願を御建て下されて、其の本願の生起本末の大もとたる五刼思惟の御苦勞、六度萬行の堪忍は、此の凡夫をして出離を得せしめ度いが爲めばかりの御苦勞である。全く以て聖人や善人の爲めでは無い。聖人や善人は或は自分の力で助かる事が有るかも知れぬが、凡夫に至りては全く其の道が堪え果てゝある。其の凡夫を助け度いが爲めばかりの御苦勞であれば、彌陀の本願は全く以て凡夫の爲である。法然聖人の『選擇集』の上には宣はく、

淨土宗の意本凡夫の爲めにして、兼て聖人の爲めなり。云云

茲になると本願の正意は彌々明かである。今の『口傳鈔』の初めに、「本願寺の聖人黒谷の先德より御相承」とお示し下されたは、即ち茲である。して見れば、「凡夫本願に乘じて報土に往生すべき正機なり」。――本願の正意は凡夫の往生が本意である。御開山聖人が「彌陀の五刼思惟の願を案ずるに、偏に親鸞一人が爲なりけり」とお喜びなされたは、即ち茲をお頂きなされたのである。茲は凡夫が頂く可き處なのである。猶ほ今の『口傳鈔』の文には續けて

……凡夫も往生しかたかるべくは、願虛設なるべし、力徒然なるべし。……

何うも何處から話しても、話は茲に落つて來るのである。抑々上來申すが如く佛のお意は、我々苦しんで居る者を何處迄も見通して下さるが佛のお意である。佛の廻向といふは我々何の力も無き者に向つて、如來の親心を現はして下さるが、佛の慈悲である。然るに「凡夫若し往生難かる可くば願虛設なるべし、力徒然なるべし」――此等のお言葉は理屈で頂くのでは無い。如來本願の上より言うと、凡夫を助くる能はずんば五刼の思惟兆載の修業も何になるか。皆徒ら事になつて仕舞ふのである。六度萬行も永刼の御苦勞も皆な虛しく心を煩はした迄になつて仕舞ふのである。斯くの如く佛の本願力は唯凡夫を救ひ度い爲めの御苦勞、唯此の惡人の私を救ひ度い爲めばかりの御骨折である。是程張りつめた佛のお意に遇ひながら、之が頂けなかつたら夫程の佛のお意も水泡になつて仕舞ふ譯である。茲は即ち先程も申した『執持鈔』の「本願や行者行者や本願」とお示し下された處が茲である。次に、

……しかるに力願あひ加して十方衆生のために大饒益を成す。これによりて正覺をとなへていまに十刼なり。……

如來の十刼が現はれて下されたのが、本願の出來上り下されてある何よりの證據である。如來のお姿の現はさせられたは、つまり此の本願成就を證據立て下されたものである。故に「しかるに力願相加して……正覺をとなへて今に十刼なり」である。法然聖人は凡歷十刼の文に至りて、常に涙を流してお喜びなされたと申す事であるが、如何にも十刼以來といふ事が聖人の胸に徹してお喜びなされた樣が頂かれるのであります。

話が色々になりますが、初めに申した御開山聖人へ法然聖人御付屬の文に「彼佛今現在成佛云云」とある、此の「彼の佛今現在に成佛したまへり」とあるが、丁度此の十刼である。茲になると我々『大經』を拜讀するに、四十八願が濟んだあとで阿難が彼の佛既に成佛して滅度を取り給ふとするか、否かと尋ねられる處がある。之に答へて釋尊が、「彼の佛今已に成佛して現に西方にまします。成佛し給ふて以來既に十刼である。今現に西方で說法してお出下さる」とお示しなされてある。此の現在西方に說法してお出下さるとお示し下されたが空なお言葉では無い。今現に遣る瀨無き思ひを持つて我々を西方に待ちて下さるのである。其の遣る瀨無きお心が本願である。此の本願を聞くと我々は之を頂かずには居られぬのである。

話が横に行きますが、西山の安心を十刼安心といふのは何故であるか。十刼安心といふのは、十刼の昔に我が往生は既に出來てあると思ふのが十刼安心である。十刼の昔に我が安心

は既に出來てあるといふのでは、其の長々十刼の間待つて居て下された本願の御親心を頂くといふ事が無い。我々は過古世の業報で猶ほ迷うて居るが、往生の一事に於ては既に疾くの昔に佛に成るよう決めて置いて下さるのであるといふ頂きようでは、親は我々を育て上げるのが親ぢやといふと同じである。夫では親の御親心を頂いたとは言へぬのである。我々は自分の身を見れば手足は動き、口はもの言ひ、色々の事も能く敎はつて居る。去りながら其の茲迄親が育て上げて下された親の御親心を頂かぬ事には、親のお悲慈が頂けたとは言へぬのである。夫と同じく我々は十刼の昔より夫程の御苦勞をかけ、夫程のお育てに預つて居りながら、其の遣る瀨無き親の御親心をば今日迄知らずに居たのである。夫が廣大の御導きにより此の度び生々世々の初事に此の廣大の親心に氣が附いて見れば、今迄斯程廣大の御念力とも知らず、彼れ是れ思うて居つた事が實に何とも申譯が無い。此の初めて親心に氣附き、今迄は實に相濟まぬと彌々身に知られた一念がまことの信の一念である。先きの十刼の昔に我が往生ははや定められてあるといふ頂き方では、此の罪惡の者を殊に哀はれみ給ふといふ本願の遣る瀨無き御親心は頂けぬのである。

さて此の廣大の本願の親心を聞いた一念には、十刼以來のお待ち受けは偏に自分一人の爲であつたかと頂かざるを得ぬ。此の一念が「當に知るべし本誓重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得」と頂いた處である。又『論註』の文で言へば「佛の本願力を觀そなはすに、遇うて空しく過る者無し」と頂いた處である。猶ほ『口傳鈔』の御文には續けて、

……これを證する恒沙の諸佛の證誠あに無虛妄の說にあらずや。……

十方恒沙の諸佛がちやんと證據に立つて居て下さるのである。若し凡夫往生が出來ぬならば、恒沙の諸佛の證誠は皆虛言になつて仕舞ふのである。

……しかれば御釋にも一切善惡凡夫得生者とらのたまへり。……

然れば既に善導大師の御釋にも一切善惡の凡夫が阿彌陀佛の大願業力に乘じて往生するのだとお示し下されてあるのである。此の一切善惡凡夫の文は『執持鈔』にも引かれてある。之も一切善惡の凡夫とあるから善人も惡人もなべての御慈悲かといふに然うで無い。次には

……これも惡凡夫を本として善凡夫をかたはらにかねたり。かるがゆへに傍機たる善凡夫なを往生せば、正機たる惡凡夫いかてか往生せざらん。しかれば善人なをもて往生す、いかにいはんや惡人をやといふべしとおほせことありき。

善人は傍機である。惡人が正機である。故に善人なを以て往生す。如何に況んや惡人をやである。之が本願の正意ぢやとお示し下されたのである。如何にも難有い御文であります。

九

さて上來申すが如く「佛の本願力を觀そなはすに云云」の一句を頂けば、もう外に他力信仰の味ひは無いのである。茲の味ひが其の儘現はれたのが『歎異鈔』の第二章であります。『歎

異鈔』第二章は何うかといふに、

彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の說敎虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば云云。

親鸞如き罪深き惡凡夫を救ふといふのが、彌陀の本願の思召である。此の本願がまことなる以上之を知らせて下された釋尊の仰せに虛言は無い。釋尊の仰せに虛言が無い以上、之を取りついで下された善導、法然の仰せに僞は無い。其の法然聖人の仰に僞が無い上は、此の親鸞の頂いた處にも誤りが有らう筈が無い。若し親鸞の頂いた處に誤りが有るならば、彌陀の本願は空しくなつて仕舞ふと仰せ下されたのである。斯くの如く何も彼も皆な根本の本願力一つを頂く處から出て來るのである。之が必ずしも『論註』の御文が本になつて仰せられたか何うかは知らぬが、何も一々文句に當てはめるにも及ばぬ。何れから頂くも、根本の如來の遣る瀨無き本願の御意を頂かぬ事には、本願は空しくなつて仕舞ふのである。去りながら夫程廣大の本願力であれば、我々は之を頂くまいと思うても頂かずには居られぬのである。其の頂き樣はと言へば、

唯念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり。

であります。

猶ほ深く遣る瀨無き如來の本願力を頂く上に就いて申せば、如來の本願の方で五劫思惟と永々御苦勞下され、兆載永劫と種々御苦心下されて、念を入れ〳〵て我々に與へ下さるの故、我々の方に於ては唯之を頂くばかりとなるのである。「夫ではあまり簡單である、もつと譯を聞き度い、あうのこうの」と言ふのは、まだ本願力の頂き樣が足らぬからである。『選擇集』中南無阿彌陀佛の廣大な謂れをお示し下されて如何に仰せられてあるかといふに、南無阿彌佛は易い故、破戒無戒の者でも頂かれる、設ひ一文字知らぬ者でも之を稱へて助かる事が出來るのである。若し持戒淸淨の者でなければにや頂かれぬとなる時は、破戒無戒の者はお助けより洩れる事になる。又忍辱精進の者で無ければ出來ぬ行法である時は、下根下劣の輩はお救ひに預れぬ事となる。されど南無阿彌陀佛とごく手短にお示し下さる時は誰でも之が頂けぬ者は無い。此の故に如何なる罪業深重の者でも、如何なる不幸に居るでも、唯南無阿彌陀佛と頂けば善いように仕て置いて下されたが此の易行の念佛であるとお示し下されてある。然らば其の南無阿彌陀佛には何が籠つてあるかといふに、佛の境界は言ふ迄も無く萬德圓滿の境であるが、其廣大な萬善萬德が皆な此の南無阿彌陀佛の中にこめさせられてあるのである。『行卷』には宣はく、

大行といふは則ち無碍光如來の名を稱するなり。斯の行は即ち是れ諸の善法を攝し、諸の德本を具す。極速圓滿眞如一實の功德寶海なり。故に大行と名く。

南無阿彌陀佛の一語の中に、此程の廣大な境界を皆な入れ込んで、此方は何も入らぬようにして、之を衆生に與へると本願に於てお誓ひ下されてあるのである。是れ程迄に本願の方で仕て置いて下されてあると頂く時は「唯念佛して彌陀に助けられ參すべしと、善き人の仰せを蒙りて信する外に別の仔細なきなり」である。頂くとなると其の南無阿彌陀佛の中に

籠つてある一々を調べて之を頂くのではない。斯樣な罪深き者を夫程迄にしてお救ひ下さるとは如何なる本願の不思議であるかと、唯其廣大のお意を仰ぎ之を信ずるばかりである。

其の頂く有樣につきては『執持鈔』の中に懇切にお示し下されてある。其文には曰く、

是非しらず、邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども名利に人師をこのむなり。往生淨土の爲めにはたゞ信心をさきとす。そのほかをばかへりみざるなり。……

「是非知らず、邪正も分かぬ此の身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師を好むなり」斯の樣な淺間しきお互の身にして見れば外事は無い。「往生淨土の爲には唯信心を先きとす、其の外をばかへりみざるなり」て、大悲の仰せ其儘を唯信ずるより外は無いのである。

……往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし、すべて凡夫にかぎらず補處の彌勒菩薩を初めとして佛智の不思議をはからふべきにあらず。まして凡夫の淺智をやかへす〳〵如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。……

玆は先きに申した『歎異鈔』の「善人猶ほ以て往生す、如何に況んや惡人をや」の御敎化とすつきり一致するのである。何うかといふに、「すべて凡夫に限らず、補處の彌勒菩薩を初めとして佛智の不思議を計ふ可きにあらず」である。補處の彌勒菩薩でさへも佛智の不思議は分らぬのである。況んや凡夫の淺智に於てをやである。之を先程の文でいふ時は、大小の聖人でさへも佛の境界は解らぬ。況んや凡夫のお互に解る事は無いのである。之をも一つ言ひ換ふる時は、初果の聖者龍樹菩薩でさへも惠みに救はるゝ時は、廿九有に至らぬのである。如何に況んや凡夫淺智のお互に於てをやである。龍樹菩薩でさへも惠みに救はれる。如何に況んや凡夫淺智のお互ひが此の廣大の本願に洩れる事があるものかといふ事になるのである。之を今度は、も一歩進めて、補處の彌勒菩薩を初めとして佛智の不思議を計ふ可きて無い。――『大經』には宣はく、

聲聞或は菩薩、能く聖心を究むるもの莫し。譬へば生れてより盲ゐたるもの、行きて人を開導せんと欲ふが如し。如來の智慧海は深廣にして涯底無し。二乘の測る所にあらず、唯佛のみ獨り明かに了りたまへり。

彌勒菩薩を始めとして如何なる聲聞菩薩も佛のお心は分らぬのである。其の有樣は生れて盲ゐなる者行きて人を開導せんとするが如してある。如來の智慧海は深廣にして涯底が無い。到底聲聞菩薩の能く知る所では無いのである。此の廣大の佛境界は唯不思議といふの外は無い。其の不思議の佛智に計はれて、彌勒菩薩も龍樹菩薩も二乘も往生するより外は無いのである。『和讃』に

五十六億七千萬、　　彌勒菩薩はとしをへん、
まことの信心うるひとは　このたびさとりをひらくべし。

五十六億七千萬歲すると佛になられる彌勒菩薩も、迚も佛の境界は分らぬもの故、『大經』で佛の大願を聞き救ひに遇はれたのである。彌勒菩薩すら既に此の斯の如してある。如何に

況んや凡夫の淺智をやである。迚ても佛境は我々に分る事では無い。偏に此の罪の者を見捨て給はぬ廣大の佛意にお任かせして往生するより外は無いのである。茲になると先程言ふ『歎異鈔』の「善人なほ以て往生す、いかに況んや惡人をや」とすづきり一致するのである。斯く不思議の本願を頂く上からは、凡ての御聖敎が皆な一つ處に出て來るのである。

猶ほ『執持鈔』には續けて、

……されば われとして淨土へまいるべしとも、又地獄へゆくべしともさだむべからず。故聖人のおほせに、源空があらんところへゆかんとおもはるべしとたしかにうけたまはりしうへは、たとへ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり。このたび善智識にあひたてまつらずば、われら凡夫がならず地獄におつべし。しかるにいま聖人の御化道にあづかりて彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりをむねにをさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと聖人さづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつといふともさらにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかばひとりゆくべからず、師とともにおつべし。されば地獄なりといふとも故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらずといふなり。これ自力をすてゝ他力に歸するすがたなり。

實に有難い御敎化である。「聖人の仰せには源空が在らん處へゆかんと思はるべし」―― 實に遠慮の無い御敎化である。「他の所へ行くのでは無いぞ。本誓重願虛しからずとある上は決して心配するには及ばぬぞ。此の源空が自分の行く所へ行くと思へと言ふのは、此の源空が本願の仰せ通りを頂いて言ふ事故、源空自身が言ふのでは無い。源空自身が本願に救はれて行く事故、源空が行く處へ行けば、つまり本願の仰せ通りの所へ行くのぢやぞ」とお示し下されたのである。仕樣の無いお互が、此の廣大の敎化に接した時には、もう何うの斯うの計ひは言うては居られぬ。言下に御開山は「設へ地獄なりとも故聖人の渡らせ給ふ處へ參るべし」と御決定なされたのである。斯く頂いた一念には、もう滿足と言つても是程の滿足は無い。世間の上で滿足といふと、あれも思ふやうに是れも思ふやうにと、凡て物事が思ふやうになるのが滿足だと思うて居るけれども、信仰上の滿足になると、たとひ「地獄に墮つといふとも更に悔む思ひある可らず」である。病氣なら病氣で滿足、不幸ならば不幸で滿足なのである。設ひ地獄へ墮ちるといふとも、師のお伴をすると思へば、是程の滿足は無いのである。其故は「此の度び善智識に遇ひ奉らずは、我等凡夫必ず地獄に墮つ可し」である。もと〳〵地獄より外行場の無い身であつたのである。夫が此度び善智識の敎化によりて彌陀の本願を承はり、往生一定と期する事、全く私の力にあらずである。―― 茲の處は何程申しても言葉に角が立つばかり、迚も御文にある程の味ひは充分に言へぬのであります。

偖て斯くの如く段々頂いて來る時は、もうお互に於ては善智識の仰せ通り、本願の仰せ通りを頂くより外は無いのである。設ひ此の仰せ通りを頂いて地獄に墮ちた處が、もと〳〵地獄は一定の身であれば實に悔む思ひは無いのである。然るに今は此の地獄一定の身を初めより御存知で、此者を救ひ度いばかりに本願の御苦勞と承はるのである。此の廣大の本願の御意を承はつてみれば、頂くも頂かぬも無い、如何にも此の仕樣の無い私一人の爲めに夫程迄に御苦勞下されたのであるかと頂かずには居られぬのである。此の廣大の御意を聞いて見れば、もう親樣の方で何事もちやんと善い樣に御心配下されて、唯頂くばかりに仕て置いて下されてあつたのである。茲に目が醒めて見れば、此方で彼是れ言ふては居られぬ。あゝ難有や〳〵と唯仰せのまに〳〵打ち任かせた一念が信樂開發の一念である。此の一念に所謂「能令速滿足、功德大寶海」である。何が滿足と言つても此のお慈悲を頂いた程の滿足は無いのである。設へ生きようと死なうと、乃至地獄へおちようと、もう此の已上の滿足は無いのである。斯くて一代御慈悲に滿足させて貰ひ、生命畢れば彌々今度は眞如一實の功德大寶海中に生れさせて貰ひ、盡十方無碍の光明に一味にして、一切衆生を利益する普賢の德を修し、蘭林遊戲の還相廻向の德迄を頂くのである、實に無限大悲の本願であります。（二月十二日）

行誡上人

旅にてよめる中に

けふは野べあすは山路と浮雲のゆくへもしらぬ旅ごろもかな

ゆきくれしあまの苫屋の草まくらぬらすはかりに浪の音する

草まくら露にちさりをむすぶ夜は月ぞ今宵のあひやどりなる

旅衣きて見るべくもしらざりき浪のうへなる安房のとほやま

黑谷に詣て

こゝにしてかかげしものか黑だにのやみをてらしし法の燈火

知恩院にありけるころ

隱れてもひれふすかげのみゆる哉浮藻の下もうき世なりけり

西行のこげ清水を見て

あはれその雫ばかりもいにしへのひとの心をくむよしもかな

高野山にのぼりける時

たかの山その曉ときくからにかねのおとさへなつかしきかな

讃仰

蓮如上人の御文

和田龍造

一、

閑寂なる一軒の農家を描くのが目的であつても唯孤獨なる一軒屋を寫したとて何の趣味もあるものではない、そが背景たる後の翁欝たる大古のおもむきある森、悠々としているく横に流るる小河をかき添ひた所で、浮世をよそにした自然のさまなる閑寂なる農家があらはるるのである、背景のなき畫は趣味の缺けたる風韻の乏しい價値なき拙畫である、親鸞聖人の絶待他力の敎の流を汲む我々御互が朝夕勤行のあとに拜讀したてまつる「御文」は、云ふまでもなく蓮如人が『敎行信證文類』を根據とし漢文和語の聖敎の精要を攝取して、百あるものを十にし十あるものを一にして。祖師聖人流の御敎は唯信心を以て肝要とする思召を御傳へ下るる御親切の結晶である、然かも『御文』は其名の示す如く御文章であつて論議解釋のために作られたでもなければ學問沙汰のために作られたでもない、五帖一通々々御文の由來は熱烈なる求道者あつて其人の懇望にまかせ或は傳道の其機緣を察して慈父慈母の愛子を敎え導くの思ひで御筆を染めなされたものである、されば『御文』を拜讀するに際して其御文の由つて來る緣由を詳にしておけば、恰も背景のある畫を見る心地と同樣であつて當時の事情狀態も思ひ浮べられ、敎へる人求る人の眞心も思ひあはされ歡喜讃仰の念愈々深くなりまさるのである、所が、從來はややもすれば『御文』の背景をのけ者にして唯其文々句々を訓詁的學究的に解釋する者が多いから其尋い有難い趣味が索然として亡びてしまうた、恰も窓前横斜の馥郁たる梅花を賞せずして、やれ花辨だの花蕚だの雄蕋だの雌蕋だのと分解して梅花の妙味を鑑賞せりと誤つたと同一ではなからうか、微力不肖なる私とても十分なるとは出來ぬなれども及ぶたけ『五帖』一通々々の背景を描いて見たいと希望するとである。

全體此『御文』といふものは蓮如上人如何なる御趣意て御かきになつたであらうか先づ始に之を伺ひたいと思ふ、御聖敎を伺ふに就てはかれこれと私見を立てるよりも前を以て後を照らし後を以て前を照らし前後照應して一部全體を觀察せば其眞意を得らるゝ、されば「蓮如上人はたゞ聖敎をばくれ〳〵と仰せられ候、又百遍これをみれば、義理おのづからうると申すこともあれば、こゝろをとゞむべきことなり、聖敎は句面のごとくこゝろうべし、その上にて師傳口業はあるべきなり、私にして會釋することしかるべからざる事なり」(御一代記聞書)と云ふは尤の次第である、そこで此『御文』を御かきになつた御趣意は蓮如上人御自身の御言葉亦御文五帖の上から頂いてみれば一番確實であらうと思はるゝ、これに二の思召がある、始には祖師聖人の『敎行信證』を根據とし其外漢和の聖敎の精要をかみ碎いて、百あるものを十にし十あるものを一に

して愚癡無智の在家のものでも、誰でも分る樣にと御示し下されたる安心の手鏡である、

其節敎(信證六軸、六要鈔表紙のやぶれ候ほど御覽じ候て、其後御文を御えりなされ候、これ千のものを百にえり、百のものを十にえり、十のものを一にえりすくりて、凡夫直入の金言をいかなるものも聞易く、やがて心得候やうにあそばし候(「山科連署記」)

御本寺北殿にて法敬坊に對して蓮如上人仰られ候、われは何事をも當機をかゝみをぼしめし、十あるものを一にするやうに、かろ〳〵と理のやがて叶ふ樣に御沙汰候、是を人が勸へぬと仰られ候、御文等をも近年は御ことばすくなにあそばされ候、今はものを聞くうちにも退屈し、物を聞きおとす間、肝要のことをやがてしり候やうにあそばされ候の由仰られ候(『御一代記聞書』)

御文はこれ凡夫往生の鏡なり、御文の上に法門あるべきやうに思ふ人あり、大きなる誤なり(『天正十三年記』)

是等の御聖敎の文によりてみるも蓮如上人の難有第一の思召は伺はるゝことである、これから第二の思召を伺ふに、蓮如上人は祖師聖人の滅後二百余年を經て御出生なされたのである、此時は時勢の然らしむる所とは申しながら眞宗衰微の狀態は目もあてられぬほどであつた、加之諸國の門徒神々の異執を起して麻の亂れたごとく眞宗の正意もまさに地に墜ちんとするの危機であつた、蓮如上人は此の衰へたる宗風を挽回して佛日を中天にかがやかせ紛亂せる邪執を掃ふて正意の安心を明かにしたい御希望で御文に御筆を染められたのである。

先師十五歳よりはじめて眞宗興行の志願にして、一宗の中絶せるを前代仰せ立られざる事を遺恨に思召し、如何してかわれ一代におひて聖人の一流を諸方に顯さんと常に念願したまひ、終に再興したまへり(『遺德記』)

しかるに寛正初暦の比より、末代の劣機に鑒みて經論章疏師資の銘釋を披閲して、愚凡速生の肝府を撰取して數通の要文をつくりたまへり、是れ末代の明燈なり偏に濁世の目足なり(『遺德記』)

又『御文』の上で頂いてみれば、第三帖に載する拜まず秘事、第二帖に載するところの善知識だのみ、世間に流布するところの何の分別もなく、ただとなふれば助かるとばかり心得たる異執等の不正義を破して祖師聖人一流の御正意を御述べになつたのである。

所が物には誤解の起り易いもので、世にも稀なる嘉言善行でも誤解のために其光りを隱くすことがある、古來『御文』に就てもいろ〳〵誤解があつて蓮師の御思召をふさいだことは少くない、されば香月院師は加樣に云ふてゐる、「世の御文を解するもの、當流の敎導御文に至つて一變せりと思ふ、これ謬りの甚だしきなり、かの三業惡業の異解をつのるものはおもへらく、祖師の敎導美なりと雖、未だ足らざる所あり、御文の敎諭に至りて始めて盡せりと、また法體づのり口稱づのりの徒は、口これをつゝしむと雖、心ひそかに御文を忌み、元祖我祖のみに因りて安心を論ず、是れみな祖談と御文と齟齬せりと思ふによりて此謬りをいたすなり」(『末代無智文講

義』と云ふてゐる、猶ほ『御文』にあらはれたる大切の法門上のことは『五帖』各通の下て、述べたいと思ふてゐる、が私の是より陳述せんとする主なる目的は、文々句々の解釋でもなく法門上のさばきかたでもなく、『御文』各通の依て起れる周圍の事情を描いて見たいと思ふのてある、所謂背景のある『御文』を御互に味はして頂きたいと思ふのてある、されど背景ばかりありて本物がなかつならば背景も背景てないことになる、本物を出さなければ背景を描かれない、本物と背景とは相離れること出來るものはない、されば『御文』の依て起れる事情背景を詳にすると共に其重要なる法門をもあはせて話させて頂きたいと思ふのてある。

全體『御文』は蓮如上人の御孫即ち實如上人の御子の圓如上人が之を集めて『五帖』一部となし玉ふた、之を集るにあたりて蓮如上人の奥書ありて年月次第のあきらかなるものは、其順序に基いて一帖より四帖となられた、奥書のなきもの二十二通を適宜に雜入して第五帖となされたのてあるが、之に就て少し申しておかねばならぬことがある、二十二通には御撰者の奥書はなけれども、實如上人及び道西、慶聞、法敬等の蓮師の御直弟の寫本には年月等の奥書ありて年月次第のあきらかなるもあつた、されど若し之に從て次弟を立つるときは御撰者の奥書し玉はざる御意に背かん事の憚りあればとて、其長文短文によらず、各一紙づつに寫して別々に是を封じて一器に納め、圓如上人自ら蓮師の御眞影の前に於て閉目なされ、是を混雜せしめて御手に任せて一通づつを取り、次第に重ねおかれ、最後に開目し給ひて一より二十二迄番付をなされ其次第に依て篇次を定め給ふた時、第一通は末代無智の御文にして第二十二通は當流勸化の御文てあつたと云ふことてありまする、此の如くにして第五帖の『御文』は出來あがつたのてある、五帖何づれにおろかはなけれども、第五帖は寺院に於ても在家に於ても最多く拜讀して法味を頂かさせてもらう習慣てある故、今は先づ第五帖目の始めから其來意緣起を陳述せんと思ふことてある、固より古德先輩の指敎に基いて之をものするのてはあるけれども、淺學寡聞の私なれば其及ばざる所足らざる處は得るに隨て增訂せんと期してゐる。

告白

聞書（前號の續）

了信

十二月三日御講師樣にて申上る。

同行同士談合致升に、一人は南無阿彌陀佛にて助て貰ふと信ずる斗りといふ。今一人は願力の御不思議なればこそと信ずると云。此義如何哉と御尋申上る。

仰に夫は同じ事じや。成就の方からいへば南無阿彌陀佛に而御助けと戴く斗り、夫が願力の不思議をふしさと信じたのじやと仰らる。

又申上る。先年長濱に而爲御聞に、あら恐や〳〵あら嬉しや〳〵の思ひのおこらぬは無宿善じやと御きかせ、其時は水なめた樣に聞て居りましたが、今私しが其場へ至りました。是は私しが罪作りながら知らずに居まする事を御知らせ被下罪で御座有升るかと御尋申仰に想ふじや。凡夫といふは生てより死ぬるまて三途の業より外の毛の先ほども無い身を、夫を知らずに居るが凡夫じや。

有難ふ御座有升。善知識の御化導より、火の空の上の綱渡りは此私が日々の所作と思ひ知らせて戴きましたれば、あら恐しや〳〵斯有る機樣を御見込と御受が立て見れば、あら嬉しや〳〵、國に一人郡に一人の仕合者とよろこび升と申上る。

仰にそふじや。本眞に國に一人郡に一人の仕合者じやほどに、其町内其村をよく〳〵吟味して見よと仰られ候。

難有御座有升。此の年に及び如此の仕合者と御育に預りましても、今に捨て行く此婆婆と合點仕ながら、此世の事はどふ成てもだしかと云氣には相成ませぬ。子孫の世話がすて兼る心中、本に淺間敷や〳〵、御冥見がお恥かしやとざんぎする斗り、此ざんぎの心が有箸て御ざり升かと御尋申上る。

仰に、慚愧の念はなけねばならぬ。極樂へ參りても殘る。難有ござり升。誠に〳〵あみだ樣に助て貰ふ身じやと云事に夜が明けましたれば、いふ事も思ふ事もつきて、今は廣大の御恩〳〵と戴斗りの仕合と申上る。

仰に隨分からだを大切にいとふて御慈悲を相續せよと仰被下涙ながらに立歸る。

正月十日、香樹院様御臨末にて聲は少も出されず、私とニイノ村の又様と二人御面を拜んで居ましたれば、長五郎此人は了信じやと被申たれば、御口の内にて仰を傍に居る若人の聞とられ候趣誠に御大切成事なり。

仰に昔は命がけで聞ねばならぬ佛法を、今日樂々と足手はこぶ計りて吾身が佛に成事を聞のなればよく聞て還れとの仰。

私が思ふに、此歸れは國や所への事ては有るまい、極樂の本家へかへれの事なるべし。

九月十三日妙御教化に、

佛智廻向と云は法藏因位の願行が皆我物に成のじや。是ては分るまいによつて諺を以て云て聞さふ。あのナアひぜんかきの傍へ寄るとうつる。其時は覺ねどもうつたは誠ゆへ、先の人の通り我身がみぢんも違はぬひぜんかきに成ふがや。法藏因位の御修行が今私の稱禮念の三業に報ひあらはれて被下るのじや。是が佛智を貰ふた身じやとの御聞せ。

扨御座果て直に御居間へ參り候所、仰に此程は久ぶり國へでも下りて居られたか。扨今は何と聞へるやと御尋ね被下候ゆへ、取手も不覺申上る。只今ひぜんの御たとへて信心ぎやくとくすると云ふも、佛心凡心ひとつに成といふも、ひし三業不相しやりと云も、南無阿彌陀佛に身を丸ると云も、誠に〳〵夜が明て慥に〳〵戴きました。もふ日本晴、嬉ひ計りて御座り升と申上る。

仰に、あなたの事が忘れられまいがのふ。其證據にはねた間もかいて居。こゝを遠如様が二心なく如來を頼む心の憶念の心常にしてわすれざるを、本願たのむ決定心の得たる信心の行者とは云なりと御聞せ被下、誠に無重切の初言を載、千人力とも萬人力ともおどりあがりました。

東都五乘院御講師八十四才上京の砌、遠州金谷宿にて肝煎同行兩三輩へ御對話。

何れも何にもいらぬ。念佛する計りて御助。念佛する計りては餘りに安と云て、中には疑やつが有。安くして呉たいとてみだが五刼永刼の御骨を折て下されたのじや。念佛する計で助かるが願力の不思議と云ものじや。またも疑て、みだ經て諸佛が證據に立たのじや。然らば念佛する計て御助と知たのが信じたのじや。夫を御文に深く頼と仰られたのじや。信ずるといふもたのむと云も念佛する計て願力の不思議て御助と知る事じや。其後は根機のよい者はたんと唱へる。よわい者はちつと唱へる。我根機次第唱へよ、御助に違ひない。在家は六ヶ敷事云な念佛すべし。

近年は六ヶ敷云者が有のう。いて見るにおれが半分知た者がない。そんな六ヶ敷事云はず一すじにせい出して念佛申せ。

一、法愛まふされさふらふ。讃嘆のときなにもおなじやうにきかて、聽かばかどかきけとまふされさふらふ。詮あることろをきけとなり。

一、憶念稱名いさみありてとは、稱名はいさみの念佛なり。信のうへはうれしくいさみてまふす念佛なり。

一、實如上人、さい〳〵仰られ候。佛法のこと、わがこゝろにまかせずたしなめと御掟なり。こゝろにまかせてはさてなり。すなはちこゝろにまかせずたしなむ心は他力なり。

一、御一流の義をうけたまはりたるひとはありとも、きゝうるひとはされなりといへり。信をうる機まれなりといへるこゝろなり。

一、佛法者まふされ候。わかきとき佛法はたしなめと候。としよれは行歩もかなはず、ねむたくもあるなり。たゞわかきときたしなめと候。（蓮如上人御一代記聞書）

慈光の照護

尾野敏雄

今から三四年前京都に居た頃てあります。如來は一體如何にしたら拜見出來るてせうと木山先生に尋ねた事がありました。私の信仰は如來を拜見しなければ確立しない樣に思て居たのてあります。其爲めに觀經の十六觀法や、善導師の御文を聞せられたが、其通り精進する勇もなく、寧ろ馬鹿らしいと思つた。

私は眞宗の寺に生れ僧侶になるために勉強して居たのてありますが、以前からクリスト敎に傾きそめてクリスチャンになろうか、或は親の犧牲だ僧侶にならうかと其頃烈しき心の闘爭時代て、兎に角佛敎の信仰を見らるゝか聞いて見よふと淺はかな考へて聖經を讀み、說敎を聞いて居たのてありました。一昨年の九月求道學舍に入舍さして頂く考へて東上致しましたが、其時滿員てすし、先生も御他行中て御目にかゝる事が出來ず、間もなく京都に歸りました。其時私は心臟性の脚氣になりまして醫師は危篤だと言たのてすが、下宿の主婦が學生には重く言はないと養生しないからてすと申しますので、私も喝して金を取る醫師も少くないからと思たのてすが、心が安かてない故さらに大槻醫院て診察を受けますと、ちと注意しないと脉搏は百六十だからと注意されまして、初めて死に瀕する病人てある事に驚いたのてす。ひし〳〵と押よせる不安悲しみの思ひを、精神を安靜にせねばならぬのだと、し

ひて沈めようとしても走馬燈の樣に後から後から亂れ悶ゆる心の中に、光となりて現はれて下さつたのは念佛でありました。

念佛は實に亂麻を斷ツ快力でありました。クリスト敎等と騷いだが、實際私の慰めとなるのは念佛より外ないのだと感じますと、悲しみも憂ひも忘れて私は唯泣くのみでありました。幸にして全快致しましたが、自個の心は賴にならないです。再び信仰に就きて不安を抱き煩悶を重ねたのです。

昨年の三月再び東上して近角先生に御目にかゝりました。其時五切思惟の本願に就きて御尋ね致しました。先生の熱心に敎へて下さる事が何だかわからず、同座に居られた九州の夫婦の方は感極ると言ふように喜ばれるに、何故私は喜ばれないのだろうと悲しかつたのです。

其後考へたのは其んな歡喜の情が人には起るものであろうか。或は僞つて居るのではあるまいかと考へたのです。

友人(同窓の那須君)に話すと、其んなに疑たつて仕方がないと笑はれたのですが、私には大なる疑問として考へたのです。如來の慈悲は別としても、今日の信仰家の樣に喜びの境に入つたら幸福だろうと思つたのです。

其後或心理學書に幻覺の說明に、十六觀法が出て居りましたので、私の心は一層亂れたのですが、萬籟寂たる夜大空に懸つて居る無數の燦然たる星を仰き見て居りますと、其の一つ一つの鋭い力に自分を吸ひつける强い力のミーニングが秘んで居るように、何とも知れぬ崇高の嚴肅な氣にうたれて思はず念佛を唱へたのです。其時考へたのは我等は少さき室に安置する渺たる畫像木佛は毀してしまつて、此宇宙大の威力の前に跪座して祈り求めたらどうであろう。佛と言はず神と言てもよい。兎に角敎理に囚へられず、聖經に囚へられないで、直ちに宇宙に對する事が出來ないか。私の心は跳つた。然し其は一の空想で、現實の私は淋しい苦しみに悶へて居るのでありませんか。到底こんな考へて救ふことは出來なかつたのです。私の友は敎へてくれた。梁川とか獨步だとか騷いだつてだめだ。兎に角念佛して見たまへ。御慈悲だから有難くなると。けれども私には念佛が出ないのです。私は唯無意識に求道學舍に通つて居りました。

十一月八日の朝丸山君の處に行て種々信仰に就きて聞いたのです。其時君の言葉に、相對の愛を我等が有する如く、宇宙に絕對の愛があると言ふことを何故か痛切に感じたのです。そうだ絕對の愛が即ち佛陀だと私は思たのですが、餘り有難くもなく喜れないので、直ちに近角先生を御訪ねして何故喜れないのですかと尋ねたのです。

如來を輕く見てはならぬと種々御敎へ下さつて、最後に先生の鄕里の地震の時の話をして下さいまして、(求道六卷の十號に出て居ります)如來の御慈悲は憐れな者を特に憐み給ふ本願だと聞せて頂いて、何だか非常に有難かつたのです。御慈悲に氣附かせて頂いたよふな氣が致しましたと、いそいそとして念佛を唱へて歸ります途中、ふと何が有難いのだと自分で問ふた。其時何故か握つて居たものを突然失つたよふな非常なる悲しみと苦しさが胸一杯になつたのです。

此夜私は熱心に嘆意鈔や安心決定鈔を操り返して讀んだのですが有難くない。多くの求道者が入信せらるゝのは此の文てはないかと、私は血眼になつて操り返し操り返し讀んだのです。私は到底だめだと疲れた身を投げて考へたのは、斯く如來は私を苦めて突然慈悲朗かに現れて下さるのではないかと暗の暗い室を見廻したのです。我に氣附いた時自分は斯くして發狂するのではあるまいか、不現に狂して居るのではないかと、尙非常の恐れを感じたのです。

斯くして十二日の夜私は悶へて居る心の中に、天地に滿てる御慈悲があても自分のようなこんな仕方ない喜ばれないものにはだめだ、少くも私には無關係だ、其慈悲と智慧とある佛界から此の私のような淺間しい者を見そなはしてと考へつゝた時、其時自分は初めて蘇生した。

そうだ、こんな淺ましい喜ばれない罪の私を憐れと言ふ御心から溢れ出たのが御本願だと、

私は初めて限りなき歡喜と平和とを得さして頂きました。たとひ法然聖人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔ずべからず候とあるあの嘆意鈔は、私の爲めに遺して下さたのではありますまいか。

私は此の御慈悲を何と申しませう、たゞ有難い言ふ外ないのです。

私の知れる兒供に、何故御母さんは好きかと尋ねますと、御菓子を下さるからと答へたのです。若し母に打たれるかしたら、滿身其時は母さん馬鹿と言ふ感が生るでせう。私の幼時の記憶も其でした。

兒供の考へは單純ですけれども、復難なる强き深き變ぜぬ慈悲は親の心です。

米場に勝たから信ずる神樣も、病氣が全快するから有難い佛も世にはあるでせう。

私の欲し願ふ所は丁度盜賊が庫の鍵が開くことを祈るようなものではないのでしふか。

私の勝ちほこる所其裏に倒れし犧牲者を見、愉快と叫ぶ裡には失意に怨む人がある。

一として信あることなしと言はれた此私の心により、此心に如來を量らんし喜ばんとして喜び得ず、進んとして進み得ざる私を殊に憐れと言ふ如來の御慈悲は常に照護して下さつて、あらゆる方便に於て此無常に知らしめ、此の虛僞なることを悟らしめ、私の病氣を通し、失意を通し、悶えを通し、苦を通して手强き惠み、不變の慈悲を知らしめて下さる、何と言ふ有難いことでせう。私は泣きつゝ怨みつゝ苦しみつゝある其裡に、殊に憐れと言ふ御慈悲の呼聲あることに安心さしていたゞく事が出來ます。

重々の御導き

宇野みね子

まだ病氣はすつかり致しませぬ。手が自由に動かぬのです。仕事は細かい事が少しも出來ませず、あらい事丈けして居ります。御講話は以前は欠がさず伺ひに參りましたのて、いつも母の來るのに連れられて參つたのてず。夫はもう余程前の事てムります。

私は只今の森川町の家て生れましたので、父は小さな呉服店を營んて居りました。生れて物心を知りました頃から、家て一日も平和な日はありませぬでして、父は余り無いかと思ふ程變つて居りまして、母を虐待するのです。其の爲めに母は善ぶやうになりましたので。私も一日も愉快と思ふ日は有りませぬでした。夫が一日も無つたのてムいます。夫が小供の時から、丁度七つ八つの時からてムいます。夫れ故母は私が總領て三人の小供が御座りましたが、其の爲め母は非常に苦みまして、父は譯無しに虐待するのです。其の爲め母は父に隱れて說敎をきゝに參りました。夫が父に聞えると大變腹を立てまして、母の念佛の聲が一寸ても耳に這入ると、臥せつて居りましても直ぐ目を醒して怒るのてムいます。其の中より母は隱れて說敎を聞きに參り、母は父の御陰て喜ぶようになつたのてムります。

私は其頃はまだ御法の事は少しも分かりませず、唯家庭が々々と家庭の事のみ氣にして居りました。父の事は初めから信じませぬから少しも聞きませぬ。父が間違つてると思ふ故父の言ふ事は少しも聞きませぬ。表べには聞いて居ても心から從はぬときめて居たのてムいます。すると父は何處迄も私が間違ひだと思ひ、私を從はせやうと致します。私も父が間違ひと思ひ、聞かずに通して居りました。其の中から母は喜びますけれども私には少しも分かりませず、說敎なんか聞かうとも思ひませぬでした。唯家庭が〳〵と、家庭の事ばかりつまらなく思うて居りました。

夫が或時父が思ひ切つた事を致したのてムいます。夫は私の事について決めるといふ時私が聽か無つたもの故、自分は小供の事はもうかまわぬと言ひ出しまして、かまわぬのみならずもう自分は働かぬと言ひ出したのてムいます。すると夫からずつと腹を立てゝ少しも働きませぬ。弟妹の事も少もかまわぬようになつたのてムいます、私ももう家がつぶれても父の事はきけ無いと覺悟きめまして、弟や妹もある事故父の言ふ事には構ふて居られ無いと思ひまして、友達に賴んて妹は傍へ緣づけ致しました。夫から弟は父が或る呉服店へ丁稚にやつて仕舞つたのてムいます。そのような有樣て家はつぶれるものと覺悟をきめて居りました。父は働か無いと言つたらもう働きませぬ。バッタリ仕事を止めて仕舞ひました。自分は思ふ事が有るから一生遊んて暮すと父は充分覺悟して仕舞つたのてムいます。

夫ても一日も母を虐待せぬ日はムりませぬ。母は怪我ばかりして居りました。夫て私は弟や妹も片づけた事てあるし、母を勸めて家を出やうとしましたのてムいます。母の言ひますには、「家を出ても暮せるか」と申します。私は「どうしても先きは黑闇みゆへ分からぬけれども、若し殺されるようの事があつてはつまらぬから、どの道暗み故出て見やうて無いか」と勸めたのてムいます。父丈け暮すには不足が無いから出ようと勸めたのてムいます。でも母は危うんで中々出ようと申しませぬ。夫は話にならぬ程の虐待を仕たのてムいます。遂ひ〳〵いやがる母を無理に勸めて家を出て仕舞つたのてムいます。出ても母は喰べて行く事が出來ぬと案じましたが、夫ても何とかなるからと言つて出たのてムいます。

家を出てからは苦しき事も無くなり、自由に御說敎も聞けるやうになりまして、家に居るより氣樂に思ひまして、夫から聞き初めたのてムいます。夫迄は私はちつとも聞いて居りませぬ。此の時から母に連れられて聞き初めたのてムります。一番初めに、村上先生の谷中の學校へ行けと言はれて參りました、十年も前の事てムいます。能く分かりませぬけれども聞いて居ると何となく善い心持になり、氣も晴れるやうに思ひまして始終聽聞に參りました。夫から綿町の東亞佛敎會にも必ず參つたのてムいます。段々行く中に少しは分るかと思ひました。此方にこんなに近くにあるとは少しも知りませず、母が荻野の御穩居さんか誰かに開きまして初めて先生の所へ參り、始終結構々々と言つて喜んて居りました。私も一緒について伺つたのてムります。母は信仰に入つて居た事を自分て知ら無つたと申しました。先生の所に伺つてから初めてそうだつたかと氣がつき、先生に打明けお話を願つたのてムいます。夫からは私も段々續いて伺つて居りましたけれども中々分かりませぬ。分からぬけれども始終分からぬながらも參つて居つたのてムいます。まだ其の時は信仰なんかとは思ひませず、唯聞いて居たのてムいます。すると段々聞いて居る中にちつとは分つて來るように思ひまして、皆さんが信仰に入つて信仰々々と仰しやるが、何ういふ風になるのが信仰か、信仰に這入つたお方は樂になるやうだが、何うすればそういふ風になれるのかと思ひましても中々這入れませぬ。夫から父が亡くなりましたのが三十九年てムいます。父が亡くなる迄は信仰に入るに就き、まだそんなに苦しい事も有りませぬでしたが、父が亡くなつてから彌々苦しくなつたのてムいます。父が亡くなる迄はまだそんなに信仰がほしいといふ心も有りませぬでした。

父は非常に酒を飲みまして、亡くなる迄一緒には居無つたのてムいます。父も寄せ附けませぬでした。如何に自分が苦しくても寄せ附けませぬのてムいます。一寸ても家の前を通ると大變怒るのてムいます。其の頃私共は丸山新町に居りました。父は一人居て誰にも世話して貰ひませず、一日酒をはなさず飲んで居たのてムいます。斯うして他迄母を困らせようと考えて居たのてムいます。弟が有るが弟には家丈け遺ればよいと思ひ、自分は他迄遊んで暮す覺悟して其の通り實行したのてムいます。不思議にも思つた通りに死にました。病氣になつた事は離れて〻分かりませぬでした。或日母が夢を見たと言ふのてムります。夫がお父さんの事だから一寸私に行つて見て來て呉れと申すのてムいます。私が參りますともう口も利けませず駄目になつて居りました。私の顏を見て

「みね」だつたかと申しまして、此の時は大變喜んだのてムります。喜ぶと一緒に惡くなり、一週間程看護する中にとうど亡くなりました。

夫迄は色々の事に紛れて居て、そんなに信仰の事も心に懸りませぬでしたが、夫から私が大變苦しくなつたのてムいます。其時に自分は斯く境遇が惡いの故、どうせ今後も男の位置に立つて働かねばならぬと考へまして、あれも仕樣之も仕樣と思ひまして、色々の事にぶつつかり苦しんだのてムいます。夫が中々苦しいんてムいます。中々競爭の激しい世の中に、男の方がばた〳〵仆れる世の中に、仕方が無いから遣らうと考えまして、さん〳〵に苦しんで〳〵苦しみ拔いたのてムいます。此時は宗敎を聞かずに居る者の方がよいように考えまして、樣々の事にぶつつかり勝手に苦しんだのてムいます。何か商賣でもして皆んなを使ひ、自分が頭になつて遣らうと思ひ、勝手に苦しんだのてムいます。矢張皆さんが遣るものてすからぬ。隨分色々の事を致しました。丸て女なんかといふ事は忘れて男の方と一緒になつてやつたのてムいます。皆ぶつゝかつて遣つて見ました。其の時は御法なんか聞か無いて居りました。世の中の人が元氣にやるのに、御法を聞くと引込んていかぬと思つたのてムいます。此の時母は私がきか無いものだから放つて置きました。私も母の言ふ事が違つて居ると思ひますもの故、きか無いと決めたら全くきか無いのてムいます。私の友達などが矢張り男の位置に居るもの故、私も其の中て遣り度いと思つたのてムいます。段々遣る中に思ふ樣には一つも行きませぬ。其の時に全く宗敎を聞か無い人の方が旨くゆく、聞いて居る人の方が不仕合せだと思ひました。色々遣つて居ります中に苦しくて〳〵なりませぬ。體質も弱はし、續かぬと思ひました。其の頃はちつとも御法は聞きませぬ。何うも宗敎を聞かぬ人の方が何にしても旨く遣るやうに思はれまして、又世の中は精神ばかりては迚も駄目だと人も申しますのてムいます。そんな事は決して無いと初めは平氣て居りますが、段々するとそんな氣になりまして、全く世の中はづるい方が勝つと人も言ひ自分も確にそうだと思つたのてムいます。今迄宗敎を聞いて居たのが間違だつたと思ひまして、バッタリ聞く事を止めて仕舞つたのてムいます。その時は然うとしか思はれ無つたのてムいます。然う思ひつゝも矢張り苦しくて〳〵、心の底ては矢張り信仰に入り度い〳〵と思つて居るのてムいます。成功し度いと思ふと一緒に、矢張り信仰に入り度いと思つて居たのてムいます。ても一方世の中に出世し度いとばかり思つて居りました。

其の中に一つも思うやうには行きませず、何んだか病氣にても成るやうな氣がしまして、何うかして樂になり度い〳〵と思ひ、夫が苦しくなつて增々思ふ樣には行きませず、何うかして信仰に入り度いと一生懸命になつたのてムいます。其の苦しみつたらムいませぬ。夫て其の中からもちよい〳〵と聞いて居りましたけれども、中々分りませぬ。母に相談しても母のは違ふやうに思ひまして、相談も致しませぬ。唯一人て信仰に入り度い〳〵と常に然う思つて居たのてムいます。明けても暮れても常に其の事ばかり思つて居りました。夫ても始終あゝ斯うと世間の心が止みませぬ。信仰に入り度い

〳〵と思ひつゝも、世の中はづるい方が勝つと思つて居たのてムります。そんな間違ひの事を其時は本當だと思つて居りました。丸て心なんか亂れて居るのてムいます。何うかして信仰に入り度いと思つても夫が分からぬのて、其時が大變苦しかつたのてムいます。母は私の苦むのが分からぬのて、お前說敎を聞かぬかと言つて呉れました。其時は此方へは伺ひませぬ。一度逃げたような心持がしまして來にくかつたのてムいます。何と無く濟まぬような心がしまして先生に御目に懸るのが面目無いような感じがしまして、來にくかつたのてムいます。

夫から彌々苦しみの極になつて、一寸災難に出會つたのてムいます。夫が私の一番の罪惡てムいます。其の時はもう心が無茶苦茶になつて居りまして、自分の境遇の惡いのも父が〳〵と、親を恨み不足に思つて居たのてムいます。口には母にも申しませぬけれども、心ては常に其の思ひが止みませぬ。一體親が自分を構つて呉れ無いからだと常にそう思つて居りました。初め父と別れて居た時は諦めて居りましたから、夫程にも思ひませぬでした。彌々苦しくなつて然う思つたのてムいます。心て親を恨み常に愚癡ばかり出るのてムいます。其の時に一寸災難に出會ひまして。夫が私の最後の罪惡てムいます。其の災難が不思議の事て、不思議々々々と思ふ事が色々有るのてムいます。夫は何れ能く考えてやつた事てムいますが、世の中はづるい方が勝つと思ひ、大きくづるくと思つたのが間違ひになつたのてムいます。其の時は信仰に入り度い〳〵と思ひながらもまだ人生の事を遣らうと思つて居りまして、夫が間違ひになつたのてムいます。其の時は自分は何處迄も眞地目でやる積りて、自分が罪を造らうなどとは少しも思つて居なかつたのに、何うしてこんな大きな罪惡を造つたのかと夢のような心地がしました。茲て自分の立場を失ふ事になるのてムいます。

此の時私は何うかして勝ち度い、自分の失敗を取り反し度い〳〵と思ひ、何處迄も勝ち度い〳〵と思ひました。何うしてても勝たなければ措かぬと思つたのてムります。夫て居て心は彌々苦しく、之は何しても信仰に入らなければ外に道が無いと思ひました。中々此時は一通りて無く苦しんだのてムいます。夫から何處迄も信仰により勝ち度いといふ心が先きになり、勝たなければ止まぬと思つたのてムいます。

其處て私は病氣になつたのてムいます。此の時は大變力を落し、勝つ事が出來ねば自分はつぶれる、仕方が無いと思ひました。一寸腫物が出來て、夫が五ヶ所も切る事になつたのてムいます。夫と一緒に身體中がきかなくなり、手の方も足の方もバッタリ動かなくなつたのてムいます。夫が出來物と一緒故熱が四十度も出て參ります。之は恐しい事だと思ひました。其の時は牛乳の五勺も飲めませず、彌々之て死ぬのかと思ひました。死ぬと思ふと何うすれば安心が出來るかと思ひますけれども、さう思ひつゝも身體が疲れて居るもの故、うつとりして居たのてムります。其の四十度の熱が一ヶ月程も續きました。氣分が惡るく、療治の痛いのと一緒て中々苦しかつたのてムいます。手も足も動かず、一寸身體を動かすにも人の手を借らねばならず、自分も寢たきり少しも動けませ

ぬ。自分では御飯も牛乳も一人では頂く事が出來ぬのでムいます。其の時に母に「お母さん、私はこんなになつた、何うしたら宜いのでせう」と初めて相談したのでムいます。母が病院迄毎日通つて呉れまして、母が來ては「お前ひとりで居るのではないのだからそんなに淋しがる事は無い。お前が病氣になつたのも如來樣がお前を助ける爲めなのだから、如來樣がついてゝ下さるのだ」と說敎して聞かせて呉れるのでムいます。「これ迄お前の眼の醒めるのを待つて居て下されたのだ」と言ふのでムります。母が然う言つて呉れるのが樂みで〳〵たまら無い、ひと時も母の來るのを待つのでムります。夫でもまだ分かりませぬ。其の中に自分でも段々身體がしつかりして來たと思ひまして、「夫でもお母さん、如何したら救はれるだらう」といつも其の場で相談する譯でムいます。母は「そんなら「精神界」や「求道」を送るから讀んだら善からう」と言つて呉れますけれども、身體がきかないから自分で紙をめくる事が出來ませぬ。人に夫迄仕て貰ふ事も出來ず仕方が無いと思つて居りました。

一日々々する中に寢返り位出來る樣になりまして、私の世話は妹がしてやらうと申して呉れましたから歸つたのでムいます。此の時に彌々本氣になつたのでムります。醫者が來月は歩るかせてやらう〳〵といつも言つて呉れますけれども、ちつともよい目が見えませぬ。もう迚ても治ら無いのだらう、此の儘不具で了るのかと思ふと、此の時は煩惱は全く無くなり、唯信仰に入ればよい〳〵と思ふばかりでムいました。茲で一生懸命になつたのでムいます。何うしても病氣は治らず唯信仰に入ればよいと思ひ、夫れから明けても暮れても之ればかり思ひました。茲でやつと落ちついたのでムいます。母に「お母さん、何うしたら善いでせう、今になつて先生の處へも行けず」と申しまして、母が來ては「お前ひとりで居て來て呉れるのでムいます。重に「精神界」の方を拜見して居りました。一生懸命で讀む故能く分るのでムいます。又皆さんが書物を貸して信仰に入れとお勸め下さるのでムいます。夫より外が無いもの故、此の時は丸きり一生懸命になつたのでムいます。其時驚きました事は、皆讀む事が私の事を書いてあるように思ひまして、夫で何うなつたのが安心したのであるか、信仰に入る時が分らぬのでムいます。去年の三月頃でムいました。夫から皆さんの告白を拜見して、苦しい時は私も之と同じやうな事があつた、信仰に入るには誰も同じ苦しみをするのか知らんなど思ひまして、大變告白が有難かつたのでムいます。夫でも何處で安心するのか、信仰に入る時が分かりませぬ。段々する中に、私は病氣に迄なつて信仰に入り度いと思つて居るのに、どうしてあんな大きな罪を造つたのかと夫ばかり思つて居たのでムいます。

其時に確か昨年の五月の精神界でした、曉烏先生の「罪惡も如來の恩寵なり」といふ御文章を拜見したのでムいます。其の大きな字の見出しを拜見した時に、嬉しいのと驚きとで何とも言はれ無い感じがしたのでムいます。夫から繰り反し〳〵拜見してる時に自分で然う思つたのでムいます。夫では私を信仰を入れる爲めに災難や何かも如來の御導ぎであつたふ、災難や始めからの境遇も此の私を救ふ爲めに夫程迄に如

來が御苦勞して下されたのであつたかと、其の時に思はずお念佛が出たのでムいます。今迄も無理に御念佛はして居りましたが、夫は能く考へて何ういふ譯で然うなるかと思ひ、成る程と思つた時に稱へて居りましたので、稱へて居ても苦しかつたのでムいますが、夫が一邊にひつくり反つたのでムいます。其の時は御念佛の出たのを自分で知らなん位だでして、其の時に此の御念佛は何うもいつもと違ふとふつと氣かつきまして、自分で稱へたとは思はれ無つたのでムります。夫れと同時に、私をこんな仕合せな身にして下さる爲めに、そんなに迄骨を折つて下されたかと思ひ、今迄に無く一日御念佛を稱へて喜んだのでムいます。喜んで居てもまだ何うもはつきり致しませぬ。母に申しますと「罪惡を如來樣が與へて下さるなどゝそんな事は少しも無い」と申すのでムいます。「夫でもお母さん私はがつかりしましたよ、今迄苦しかつたのが夜が明けた樣に思ひますよ」と申すのでムいます。すると母は「そんな事でがつかりする事は無いだらう」と大變考へて居りましたが「樂でもお前が樂になつたと言ふから然うかも知れぬが、大事の事故誤りの無い樣にせねばならぬ」と斯う申すのでムいます。其の時に「先生の「懺悔錄」はまだ拜見した事が無いから拜見し度い」と申しますと、母も「樂がよい」と申して、夫から拜見したのでムいます。夫を拜見すると先生の苦しんで夜の明けた時に、私も能く似てるやうに思ひまして、「お母さん、やつぱり樂になつたのでせう」と申しますけれども「でもそんな事は無い」と中々承知し無いのでムいます。其の時は今迄の境遇も何も彼も、茲迄私を追ひ出して下されたのだと思うと、嬉しくてたまらなかつのでムいます。でも母は大變案じまして、「其の樣な事では機の深信が起らない譯だ」と大層心配して呉れたのでムいます。「いゑお母さん、起りましたよ、起り切つて仕舞ひました。此の樣な者を此程迄もして御心配御苦勞下され目を醒ませて下されたのか」と、此の時になつて今迄の惡いといふ事が本當に分つたのでムいます。今迄の樣な横着な事はなかつたと、其の時に何處迄も自分の罪の深いといふ事が分つたのでムいます。今迄は自分も惡いが人も惡いと思つて居たのでありますが、此の時は自分程惡い者は無いと人の事なんか消えて仕舞つたのでムいます。此の樣な罪の深い者を是程迄にして御救ひ下さるかと氣の附いた時は不思議な位、自分で御念佛を稱へたとは何うしても思はれませぬでした。其の時助つたのか知らぬと思うと嬉しくて〳〵仕樣がありませぬ。今迄のような勝ち度いなんぞといふ意は全く無くなつたのでムいます。

でも母は中々承知致しませぬ。自分で不思議だと思ひましたけれども、母はそんな事は無いと申して、何うしても承知せぬのでムいます。最後に「お母さん、此の樣な者を是程迄にしてと、申すと「夫れなればよいけれども」と初めて申したのでムいます。初めて氣の附いた時は、唯信仰に入り度い〳〵何うしたら入れるかと苦しんで居る時に曉烏先生のあの御文章が見えたものですから、私の爲めに之をと喜んだのでムいます。話にならない程苦しい時に、夫が一寸見えたのでムいます。今では母も大層喜んで呉れまして、曉烏先生のお陰でお前は樂になれたのだから、能く行つて伺へ〳〵と申して、私も曉烏先生が一番申上よいように思ひまして初めて伺つたのでムいます。其の時には佐々木先生が御出になりまして、其の時も皆さんに、親心が分らないでせう、親心に氣づく一つだとの御話でありました。私も丁度其處だと思ひまして、其の歸りに不思議と此方の先生に御目にかゝつたので有ります。實に不思議だと思ひます。夫から毎日曜講話に又御伺ひするようにさせて頂き、まことに難有く喜ばせて頂きます。母も今も文夫で喜ばせて貰うて居ります。（完）

時報

仰恩紀行

慶哉、樹心弘誓佛地、流念難思法海。深知如來矜哀、良仰師教恩厚。慶喜親至、至孝彌重。

昨年の暮我法主臺下北陸御駐錫の事ありてより、遙に北國風雪の中に祖師中興上人の芳躅を追ひ給へるを慕ひ且御病氣の報に接してより不安の念絶えざりしが、恰も第三回駐錫紀念傳道の爲め、金澤なる駐錫地に到りて三日間傳道に從ひ歸路鄉里江州に立寄りて亡父七年忌を營みて追孝の志を滿たし、且有緣の地に傳道するを得たり、良に師敎の恩厚を仰がずんばあらず、聊か其紀行を叙して慶喜至孝の情を披かんと欲す、二月十七日夜眞宗大學寄宿舍に於ける信仰談話會に出席して、二十七年前父に携へられて京都に遊びし古を回想し、當時の學生生活を懷ひ、爾來宗門養育の恩德を蒙り遂に煩悶入信の實驗を經て、眞の知識に遇ひたてまつるの慶喜を叙せり、燈下往を追ひ來を語り、慈光の護念洵に感謝に堪へざるなり滿身の恩籠を齎らして大塚停車場より新橋に到り、直に出立の途に上る、夜雨蕭々却て懷舊の念を增さしむ。

車中席濶かにして眠穩かなり、名古屋に一青年老父故舊に送られて洋行の途に上るものあり、別離の情慘として見るに忍びず、嘗て航西の時老父に別れし昔を回憶して同情の念に堪えず、求道一册を贈りて慰め且つ戒む、米原に下車して我母の來り迎えたまふに會す、乃ち午餐を共にして別後半歲の積もれる話、互に綿々として盡くるを知らず、北行の汽車に同乘して、歸路に營むべき亡父七年忌の準備につきて相談す高月にて母上下車して歸りたまふ、寒風淅瀝として白雪粉々たり、枯坐寂然として獨り北に向ふ、越前境に至りて積雪堆く、寒國の光景事毎に新奇を感ぜしむ、滿月白皚々たる野外を展望しつゝ金澤に入る、坂君の迎を受けて旅宿に泊す、時に十八日午後九時。

翌十九日昧爽別院に詣で、能淨院殿に見えたてまつる、直に雪を踐みて出立、越中能登に向ひたまふ、勞苦感謝に堪えざる也、和田、興地諸師に會談す、京極逸藏君來りて一昨年廣島傳道已來の久濶を叙す、君の招によりて午後崇信學舍に至る、門前に至りて其票札を一見し、居然なる寄宿を看るに及び靈感頓に湧く、嗚呼四年前第四高等學校道友會の釋尊降誕會に出席したりし時、學生諸氏の奮勵に感ずるの餘、信仰的中心を作らんが爲に學舍の創立を慫慂したりき、而して今や來りて之を事實に見る、皆是佛智不思議の御力たらずんばあらず、各室を巡見して佛間に至り、嘗て需めに應じて學舍を命名せしときの書面、額として楣間に掲げらるゝを見て、感極りて稱名念佛するのみ、食堂に午餐の饗應を享けて恰も求道學舍にあるの感あり、午後恰も臘扇會發會なり、梅原嚴矣君初め道友集るもの約三十名、歎異鈔第二章第三章につきて他力の本意を仰ぐ一時間半、時迫るを以て別院駐錫紀念傳道演說會に臨む、我を待つこと久し、御駐錫につきて感謝の至情を披瀝して今春已來深く感ぜる如信上人覺如上人の御辛苦を初めとして、傳燈相承の善知識の恩德を叙し、特に蓮如上人法燈微かなるの時之を再燃せしめたまふ古を偲びて、今回御駐錫の眞精神、偏に宗祖已來相承の本願の眞意を傳へたまふに在り、若しこの眞の知識に遇ひながら若し本願力に遇はずんば是空しく過ぐるもの也、駐錫を空しくするもの也、かくては宗祖歷代の御苦勞も徒然たるべく、五劫思惟の本願も虛設なるべし云々と、夜市街各所寺院に於て開會、亦詳しく如來選擇の願心を詳說して、特に罪深き我等を悲憐して、切々愛々の情堪えがたく、十劫已來待兼ねたまへる親心の甚厚なるを仰ぎ奉る。

翌二十日國田君雪を冒して來訪、昨夜の講話によりて初めて親心を知りて慚愧の念を生ぜりとて且つ喜び且つ謝せらる、午後市會議事堂に於て他力の本意と題して「善人なほもて往生をとぐ、況んや惡人をや」の如來大悲の御心を說く、夜梅原嚴矣君の招によりて金石同君の寺に於て信仰談話會を開く、四年前初めて同寺を訪ひて歎異鈔を話せし時は、耳を傾くるの人なかりしが、今や村中信念湧き出でゝ來聽の人庫裏に溢る、信友交々告白をなす、國田君昨夜の喜を述べて懺悔し、梅原君眞面目に御慈悲を喜ぶ、予亦國田君の語に任せて昨夜の如く親心を仰ぎ、示談の席に於て求道誌上了信禪門の聞書を讀む、愛樂法味極りなし。

二十一日雪積りて馬車通ぜず、宗祖聖人の眞筆を拜し、亦松榮寺に聖德太子を拜す、正に御祥月也、既にして金澤專光寺に詣で、宗祖眞筆聖德太子御贊文を拜したてまつる、是實に多年の宿望を成就するもの、全く慈恩の賜たらずんばあらず、事自督欄に出づるが如し、午後高等學校講話部の招によりて、十七憲法を中心として、人生と信仰の關係を說く、夜津幡の本林武田兩君及び崇信學舍諸君來訪、信仰談益々深くして益々如來願心のやるせなき親心を喜びたてまつる、實に大慈大悲の善巧方便の種々不可思議なるを仰ぎたてまつりて、益々大に須らく慚愧すべき也、南無阿彌陀佛

二十二日本林武田兩君に送られて金澤を出立し、金津永宮寺に講話す、自然にはからはずして、太子御命日に、蓮如上人太子堂の御奧を書きたまひし御緣深き聖像を拜し奉る、東京より齊らす新調白衣を着し、稽顙作禮感泣措くあたはず、南無阿彌陀佛〳〵。

二十三日早朝江州高月驛下車柏原村淨法寺に至る、是れ六年前戰死せる我徒弟勇精院大觀師の寺也、昨年其碑成るを以て之を展せんが爲也、此日恰も法莚の開くるに遇ふ、乃ち讀經し、且つ法話す、君は予と同年生來兄弟の如し、君既に無爲涅槃界に入りて六年、我來りて君が遺寺を訪ひ、君が碑を讀む、嗚呼、其夜歸鄉、先づ父の墓に詣で、母に見えて歸來を告げ、燈を剔て語りて夜半に到る。

二十四日二十五日準備二十六日二十七日一晝夜佛前莊嚴を具足し、近隣の法中及親戚を招待し嚴重なる勤行を以て亡父慈光院七年忌法要を營み、自ら法話を爲し、追慕慈恩のやるせなきを讃嘆して、護持養育の德を仰ぎ奉る、南無阿彌陀佛

二十七日午後、富田小學校同窓會の講話を爲す、信仰の實驗を語る、夜同村佛光寺懸所に於て法話す、同所詰源善英師は嘗て九州東陽師塾に於て遇ふ所、再び故鄉に遇ふ、宿緣最

も難有きの至りなり、二十八日朝味爽起きて虎姫停車場に赴きて、臺下の再ひ金澤御駐錫地に向ひたまへるを送りたてまつる、車窓一たび遇ひたてまつりて身心大滿足を得、歸來同所に於て遇無空過者につきて法話を爲す、午後久しぶりにて組内相續講小會に出席して法話を爲し、夕歸寺法話す、

三月一日弓削村來現寺興德會に赴きて講話す、是恰も亡父中陰中に初めて至り聖德太子建立にして今其遺跡を存する滿願寺の本尊聖觀音の國寶となりたまへる喜の爲に法話を爲したる寺にして前號已來掲げたる聞書をかける了信師の村也、其時の法話が因緣となりて其孫に當るの方昨年入信したまへると告白の如し、天海君遠く來りて法を求めらる、其夜演說、翌二日朝謹みて聖像を拜し來る、一昨年求道表紙に書く所、法話後高月驛に至りて臺下の御歸山を送りたてまつる、車中臺下及び能淨院殿に見え高恩を鑽仰して慶喜彌々至り、至孝彌々重し、

三月四日一書夜母の里、大井村西雲寺に至りて叔父の法要を營み、法話を爲す、某の河某の森、幼時遊びし所、追慕禁じ難し、況んや叔父の恩義に於てをや、四日午後曾根村青年會に於て講話す、昨年震災の中心點會場善良寺は我家に在りし女の嫁して壓死せし家、遺子嘻々として遊ぶ、覺えず涙下る、臺下特に染筆法名を賜ふ、曰く功德院釋尼妙貞、香を燒き、經を讀み諸行無常の偈を說きて雪山童子の昔を偲び一初の衆生死の緣無量を面り見て、平生の時善知識の敎の下に歸命の一念發得せば、其時を以て娑婆のおはり臨終と思ふべしの聖訓今こそ肝に銘しける、夜半風雪の裡に見送りを受け、長濱停車場より歸東の途につく、汽車國府津を過ぐる時、氣候暖かにして身心融せんとす、五日正午過新橋着、一家喜び迎え小兒嘻々禁ぜず、直に九段土曜講話翌日學舍日曜講話に待ち兼ねたまへる御同朋に見えて旅中大悲恩寵の渥きを感謝奉る。

南無阿彌陀佛。

求道會館設立喜捨金受領報告（第四十三回）

一金貳圓也　越前　松澤鼎成殿
一金參圓也　東京　岡部民子殿
一金貳圓也　東京　松崎壽三殿
一金五圓也　東京　安達憲忠殿
一金壹圓也　信濃　無名氏殿
一金壹圓也　新潟　忠作次殿
一金壹圓也　鳥取　中村松二殿
一金參拾錢也　信濃　津田八左衛門殿

小計金拾五圓參拾錢也

通計金參千參百六拾貳圓八拾四錢也

右御寄附を忝うし難有く奉存候茲に謹みて奉感謝候也

眞宗京都中學敎授　大須賀秀道先生新著

歎異鈔眞髓

（此好機を逸する勿れ）

製本四六判總布クロース背表金文字入
定價金壹圓　郵稅八錢
豫約金七拾錢　郵稅八錢

豫約期限三月中

●期限過經後は定價に復す
●前金に非ざれば豫納と見做さず

（製本出來四月一日より着金順により送本）

眞宗京都中學敎授
安藤州一先生著

歎異鈔講話

安藤州一先生著

安慰錄

好評第二版出來
定價貳拾五錢
求道讀者郵稅不要

定價六十五錢
求道讀者郵稅不要

發行所　法藏館
京都市　電話大阪二七〇四
東京　二座一六八番

近角常觀著作書目

親鸞聖人の信仰

第貳版　小包料八錢　定價金七十錢

本書は嘗て本誌に連載せる眞宗慶嘆に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

冠頭　歎異鈔

第四版（用紙施本）　定價五錢　郵稅四冊迄二錢

此の「歎異鈔」は讀み易きよう字をまばらに植え、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より參照すべき要文を引用し、叮嚀懇切に作りたるものなり。

部數に應じ充分割引す

冠頭　唯信鈔文意

新版（用紙施本）　定價七錢　郵稅三冊迄二錢

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊信して、愚癡盲昧の我等が爲めに其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の著あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所感ずる所ありて此の兩書を一冊にまとめて刊行すること。冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君幸に熟讀玩味して無上の法味に浴し給はん事を。

部數に應じ充分割引す

懺悔錄　附錄『歎異鈔』

第六版　定價二十錢　郵稅貳錢　袖珍本

本書は著者が實驗の信仰に基づき、古來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歲以上胸中に蓄積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ懺悔錄の名ある所以にして。一讀入信の人少からず。

申込所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

前田博士題字
近角常觀序

泉文學士叙傳
故菅瀨夫人日誌

よろこびの跡

紙數二百餘頁
定價廿錢
郵稅二錢
十部以上割引

右は本誌前々號及前號の告白欄に其一部を掲載せる故菅瀨令夫人の日誌全部を輯錄して、今回紀念の爲め印刷發行、知人間に配分せられたる者に候。猶ほ殘部有之候に付、有志の諸君は御申込相成り度く、最も夫人の日誌が飾るなく、僞るなく信仰より來る實生活其儘の告白なる事は、既に本誌にて御承知の通りに候。若し全體を通讀せられ候はゞ如何ばかり有難き事ならんと存候、右謹告候也

發行所　東京市本郷區東片町一三八　同和學園
申込所　東京市本郷區森川町一振替口座一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回十五日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
一　郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵劵代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵稅一冊に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十三年三月十二日印刷
明治四十三年三月十五日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

東京市神田區表神保町
大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎他力の本意　自督

◎信如上人御墓及び唯圓房の遺跡
唯圓房の遺跡
岩船願入寺
金澤の道中
如信上人の御墓
山村の一泊

講話

◎無上淨信の曉　近角常觀

聖傳

◎ヂャータカ釋尊傳　了信
第一、久遠劫の昔

告白

◎遠慶宿緣

歌咏

◎哀歌　增田甚

時報

◎昨年の求道講話
一

求道第七卷第二號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十三年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）

東京市神田區淡路町二ノ一三光堂印刷